

敬愛短期大学総合子ども学研究所

# 年 報

2025（令和7）年度

敬愛短期大学



---

# はじめに

## 齋藤 めぐみ

2025年度の敬愛短期大学 総合子ども学研究所 年報が発刊できましたことを大変嬉しく思います。2018年度創刊から数え、8号目、学校名が「敬愛短期大学」に変更されてから2号目となります。

事業の主担当として活動を進めてくださり、今回報告書を執筆して下さった総合子ども学研究所委員の教職員の皆様、論文を書いて下さった教員の皆様、編集の担当をして下さった教職員の皆様に感謝申し上げます。

総合子ども学研究所は、本学専任教員を所員として2009年に開設され、「子どもを様々な視点から、学問的・実践的見地に基づいて研究し、本学の教育の充実発展を図ると共に、地域の教育・保育に寄与することを目的」として活動しています。

今年度は、「子育て支援を考える」を基本テーマとして、各種事業および研究に取り組んでまいりました。テーマに沿った主な事業として、「子育て支援ワークショップ」と「現代子ども学公開講座」を実施しました。

昨年度、試験的に開始した「子育て支援ワークショップ」は、今年度は規模を拡大し、参加者数も飛躍的に増加しました。大学のもてる資源を最大限に活用し、学生にとっても学びとなる、本学ならではの子育て支援事業として、ブラッシュアップゼミ単位で8つのゼミが参画し、延べ9回のワークショップを実施しました。参加者からは、学生の子どもへの関わり方から養育者自身が学ぶことができた点を評価する声も多く聞かれ、教員として本学の学生を誇らしく感じています。詳細については、事業報告および論文において藤川志つ子准教授が紹介しておりますので、ぜひご一読ください。

また、今年で26回目を迎えた「現代子ども学公開講座」は、学園創立100周年に向けた特別企画として、3時間にわたるフォーラム形式で開催しました。Eテレ「すくすく子育て」等のメディアにも多数出演されているNPO法人コドモノミカタ代表井桁容子先生を講師としてお迎えし、「子どもの育ちに寄り添う乳幼児保育の実践と展望」をテーマに、「本当の意味で子どもに寄り添うとは何か」について基調講演を行っていただきました。続いて、認定こども園千成幼稚園 園長 南光代先生、学び舎ゆめの森 校長・園長 南郷市兵先生、本学 新田司教授による、地域を巻き込んだ子育て支援や保育者養成をめぐるディスカッションを実施しました。

その他の事業として高大連携については、連携校への実習先紹介や出前講座を積極的に行い、関係を深めました。高校生を対象とした事業としては、12月24日に千葉市と敬愛短期大

学の間で締結された相互連携協定のプロジェクトのひとつ「保育者になるには体験」を研究所が担うことになり、高校生22名が市内の保育園で保育体験を行いました。

さらに今年度は、卒業生から現場の課題を掘り起こし、研究につなげたいという思いから敬愛フェスティバルにおいて教員による研究発表と併せて、卒業生による「しゃべり場」を開催しました。また、夏休み期間には絵本の勉強会も実施しました。いずれも好評を得たことから、今後も継続して実施する予定です。

以上、各事業の詳細につきましては事業報告をご覧ください。今後とも、本学の事業および研究活動へのご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

(敬愛短期大学 総合子ども学研究所 所長：齋藤めぐみ)

# 敬愛短期大学総合子ども学研究所 年報

## 目次

---

はじめに	1
I 事業報告	
1 現代子ども学公開講座	7
2 研究発表会と卒業生と語ろう	10
3 絵本の勉強会	14
4 子育て支援事業	16
5 高大連携教育	21
6 千葉県連携事業「保育者になるには体験」	23
II 研究論文等	
「劇遊びプロジェクト」の実践	
～コラボレーション授業の取り組み～	大野 雄子・小熊 真弓 27
保育における絵本の位置づけと保育者を対象とした絵本の研修会のあり方の検討	
～実践的アプローチ～	齋藤 めぐみ・吉村 真理子 37
保育者養成校における子育て支援事業に期待される役割と可能性	
～学生主体の子育て支援ワークショップの取り組みから～	
～実践的アプローチ～	藤川 志つ子・齋藤 めぐみ 49
発達支援における個別リトミックの有用性に関する研究	
～情緒的安定とコミュニケーション能力に着目して～	二見 美千代・土谷 優 69



---

# I 事業報告

---



# 現代子ども学公開講座

第26回現代子ども学公開講座を「子育て・共育ちフォーラム～未来を育てる温かなつながり～」として、2025年11月24日（月・祝）13時から16時に開催した。NPO法人コドモノミカタ代表理事の井桁容子先生による基調講演「子どもの育ちに寄り添う乳幼児保育の実践と展望」の後、認定こども園千成幼稚園園長 南光代先生、学び舎ゆめの森 校長・園長 南郷市兵先生、本学教務部長 新田司教授が登壇し、パネルディスカッションを行った。続いてダイアログセッションを実施した。

## 1 現代子ども学公開講座実施概要

○講演タイトル：「子育て・共育ちフォーラム～未来を育てる温かなつながり～」

○開催日時：2025年11月24日（月・祝）13：00～16：00

○場所：本学2202教室

○講師：

- ・井桁容子先生（NPO法人コドモノミカタ代表理事）
- ・南光代先生（認定こども園千成幼稚園 園長）
- ・南郷市兵先生（学び舎ゆめの森 校長・園長）

○参加者：本学学生、地域の保育者、地域住民（学部学生参加者13名）

○準備スケジュール

7月：依頼状発送、打ち合わせ、ちらし・ポスター作成

8月：ちらし配布（千葉市、保育・施設実習先巡回時、高大連携校）、HP掲載

9月：前日（11月21日）から当日（11月24日）までのスケジュール作成

○当日スケジュール：

13：10～14：00 井桁容子先生基調講演

「子どもの育ちに寄り添う乳幼児保育の実践と展望」

14：10～15：15 パネルディスカッション

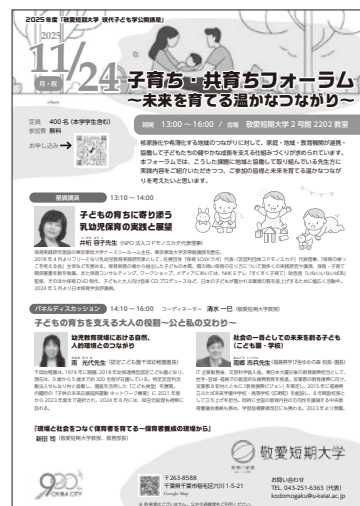
実践紹介：南光代先生「幼児教育現場における自然、人的環境との繋がり」

南郷市兵先生「社会の一員としての未来を創る子ども」

新田司先生「現場と社会をつなぐ保育者を育てる～保育者養成の現場から～」

15：25～15：55 ダイアログセッション

テーマ：「保育・子育ての困りごとを相談できる相手、相談や協力を求める場合の障害（抵抗感）は？その障害（抵抗感）を和らげる方法とは？」



## 2 事前・事後学習

対象：2年生の保育教職実践演習の授業

事前学習：

- (1) 井桁容子先生、南光代先生、南郷市兵先生の紹介
- (2) 井桁容子先生の保育観、実践の紹介
- (3) 井桁容子先生のナーサリールームの実践から考える  
井桁容子先生のテキストの事例研究（学生によるグループ活動）

事後学習：

振り返りシートをもとに公開講座をグループで振り返り

- (1) 講師の先生方のお話についての感想
- (2) 講演をとおして、これまでの自分自身の取り組み（実習、ボランティア等）の振り返り
- (3) 学生からの質問をもとにしたテーマをグループで考える
- (4) 自分がポジティブ（ごきげん）になる方法をどのように保育時間に応用するかを考える
- (5) 自分や子どもの幸せにとって、素晴らしいと思う歌詞（楽曲）を紹介、またその歌詞にどのような意味付けをしたか説明

## 3 講座内容

### (1) 井桁容子先生基調講演：

子どもの安心と主体的な育ちを支える関わりや環境についてお話して下さった。子どもは日常的な大人の関わりから安心感や信頼関係を形成している。保育者がその専門家として子どもに「寄り添う」関わりとは、行動に表れることだけに対応するのではなく、その背景にある思いや理由を理解し、状況に応じて援助することであることが示された。こうした関わりが、子どもの次の遊びや挑戦につながる基盤となる。

また、子どもの主体的な意欲は、安心・安全な環境の中で生まれ、安心と挑戦が相互に循環することで、遊びや試行錯誤、好奇心の広がりが促される。

### (2) パネルディスカッション：

実践報告では、千成幼稚園における自然環境を生かした遊びの取り組みや、学び舎ゆめの森における遊びと探究を連続的につなぐ実践、敬愛短期大学における地域連携を通じた保育者養成の取り組みが紹介された。その後、相互に質問しあうディスカッションタイムを設けた。

### (3) ダイアローグセッション：

参加者がテーマに基づき、子育てや保育の課題を共有し立場を越えた意見交換を行った。



井桁容子先生



南郷市兵先生



ダイアログセッションで質問する学生



謝辞を述べる学生代表

(文責：齋藤めぐみ)

## 研究発表会と卒業生と語ろう

### 企画趣旨

- 1) 本校の教員の1年間の研究成果等を学生及び来場者に向けて発信することで、本学教員の専門性について広く周知するため。
- 2) 専門性に特化した2024年度ブラッシュアップゼミについて来場者や1年生に周知するため。
- 3) 本校の卒業生が気軽に立ち寄れる、現場の課題を共有できる「ホーム」としての心のよりどころとしての機能を充実させるため。

### 企画内容

#### 1) 教員の専門分野の研究紹介

- ・敬愛フェスティバル（学園祭）の当日・第1日目にブースを作り、その場にて所員である教員の専門分野の研究内容について掲示する。

会期 2025年10月18日（土） 1号館6階クリエイティブ・ラウンジ

内容 2024年10月～2025年9月の時期に学会等で発表した研究、紀要等論文、発行した書籍、冊子などの展示紹介。

#### 2) 2024年度のブラッシュアップゼミ報告会の紹介

- ・2024年度のブラッシュアップゼミ報告会の発表動画をデジタルサイネージで映写した。

#### 3) 卒業生との交流

- ・卒業生が立ち寄れる場を用意し、教員にも協力頂き仲間や教員と話せる場を設置した。
- ・茶菓子も用意してくつろげる空間となるように工夫した。



## 卒業生との交流を通じて

- ・30名程度の卒業生の立ち寄りがあった。今春卒業して初任の保育者として勤務する卒業生、卒業後数年が経過した卒業生、1～3名程度の子どもを同伴した子育て中の卒業生、等が主な来場者だった。
- ・卒業生や教員の近況について相互に話し合うことができた。卒業後、様々な場で活躍する卒業生が、保育者として、子育て世代の保護者として直面する課題や悩み等について、学生時代に戻って、本学の各教職員と本音を含めて気軽に話をすることができたということである。卒業生にとっては、リフレッシュする和やかな時間を持つことができた様子である。

## まとめ

- ・一般の来場者を含めて、最近の教員の教育・研究成果を発信し、認知度を高めることができた。
- ・卒業生と教職員、卒業生と卒業生等の相互の交流を図ることができた。
- ・在学生や一般の来場者も往来可能な会場だったため、卒業生と交流する会場が設けられていることを周知することにも繋がった。
- ・隣接する会場教室は、短大交友会の会場だったため、卒業生に対する催しとして相乗効果を図ることができた。

参考資料 教員の教育研究紹介・2024年10月～2025年9月（執筆者 五十音順）

### 【池田純子】

- ①池田純子「乳幼児の保育における保育者の主体性のとらえ方—保育者のインタビュー調査を中心に—」『敬愛短期大学紀要 第47号』2025年3月
- ②池田純子『造形表現が深まるヒント』2024年10月初版（共著）
- ③池田純子「空き箱+描画材であそんだら・・・」『あそびと環境 0・1・2歳』2024年12月号（雑誌記事）
- ④池田純子「片面段ボール+描画材であそんだら・・・」『あそびと環境 0・1・2歳』2025年3月号（雑誌記事）

### 【大野雄子】

- ①大野雄子「持続可能な「こどもまんなか」の街づくりの一考察 ～「人+人（ひとひと）プロジェクト」実践報告～」『敬愛短期大学総合子ども学研究所 年報 2024年度』2025年3月
- ②大野雄子「大学生の被援助行動について～MBTI<sup>®</sup>\*1 認定ユーザーとして思うこと～」『敬愛短期大学紀要 第47号』2025年3月

#### 【神永直美】

- ①篠田明音・神永直美「幼児期に賢い [からだ] を育むための指導方法の探求—大学附属幼稚園5歳児を対象に—」『茨城大学教育実践研究 (43)』 pp.36-46, 2025-04-23
- ②今泉友里・神永直美「幼児教育におけるドキュメンテーションの普及と茨城大学教育学部附属幼稚園での導入」『茨城大学教育学部紀要 (教育科学) (74)』 pp.567-576, 2025-01-31

#### 【久保木健夫】

- ①久保木健夫「製作をねらいとした園行事と子どもを中心にした保護者の保育参加：認定こども園・Y園の保育実践と造形表現の考察」『敬愛短期大学紀要 第47号』 2025年3月
- ②2024年度ゼミ生、久保木健夫「子どもと造形表現ゼミ・発表資料」敬愛ブラッシュアップゼミ・2024年度全体報告会、2025年1月
- ③2024年度及び2025年度・授業受講学生、久保木健夫「授業「保育内容演習・表現」(造形表現)の学生作品の展示紹介」2024年10月、2025年10月
- ④久保木健夫、上田和美(保育実践・研究協力)「子どもの育ちを支える絵本と総合的な指導における造形表現—絵本からひろがる幼児教育・保育の実践と小学校とのつながり—」『教育美術』2024年11月号、教育美術振興会(雑誌記事)

#### 【齋藤めぐみ】

- ①齋藤めぐみ「保育者養成校の短期大学生におけるSDGsに関する認識」『敬愛短期大学総合子ども学研究所 年報 2024年度』 2025年3月
- ②齋藤めぐみ「母親の子育て不安を軽減する絵本の検討：絵本を用いた子育て支援の一考察」『敬愛短期大学紀要 第47号』、2025年3月
- ③2024年度ゼミ生、齋藤めぐみ(指導)『私が選んだ子どもの生活絵本』Vol.3(2024年度)

#### 【酒井基宏】

- ①酒井基宏『保育内容「言葉」と指導法：子どもの心のことばに耳を澄まして』萌文書林(共著)
- ②酒井基宏「パネルシアターの教育的価値についての一考察：日本とベトナムの幼児教育の比較から」『敬愛短期大学紀要 第47号』、2025年3月(共著)
- ③酒井基宏「ベトナムでの食育教材の開発(ハウス食育品)」(パネルシアターと写真を展示)

#### 【清水一巳】

- ①清水一巳「保育施設における園庭改良と遊びの変容過程」『敬愛短期大学紀要 第47号』 2025年3月
- ②清水一巳、新田司「保育施設における園庭改良の取り組みと課題」『敬愛短期大学総合子ども学研究所 年報 2024年度』 2025年3月
- ③清水一巳『自然遊びに関する報告書2024』敬愛ブラッシュアップゼミ報告書

**【藤川志つ子】**

- ①藤川志つ子『発達障害のある子の保育』チャイルド本社
- ②藤川志つ子『難病児受け入れのための安心ハンドブック』一般財団法人 健やか親子支援協会（共著）
- ③藤川志つ子「重度・重複障害児の協働的な学習の意義—他者への気づきと関係性の理解からの学び—」『敬愛短期大学総合子ども学研究所 年報』2025年3月（共著）

**【吉村真理子】**

- ①吉村真理子・上田和美「絵本の読み語りから生まれる疑似体験 ～「ごめんねともだち」の読み語り実践報告～」『敬愛短期大学紀要 第47号』pp.75～80、2025年3月

（担当：久保木・大野・藤川 文責：久保木健夫）

## 絵本の勉強会

2025年7月26日（土）、交友会に協力していただき、卒業生を対象とした「絵本の勉強会」、付随して「絵本専門士認定資格取得のための受験対策講座」を開催した。また、勉強会と講座の間には、「絵本専門士認定資格合格お祝い贈呈式」を執り行った。概要は以下の通り。

### 1 「2025年度 絵本の勉強会 絵本専門士資格取得受験対策講座」概要

- 開催日時：2025年7月26日（土）：10：00～15：00
- 場所：1605教室
- 講師：伊藤明美先生、生田美秋先生
- 対象年齢：本学卒業生＋学生
- 参加者：卒業生、在校生、地域の保育関係者を含めて21名
- スケジュール
  - 10：00～12：00 絵本の勉強会、絵本専門士合格者お祝い贈呈式
  - 12：00～13：00 ランチ交流会
  - 13：00～14：00 絵本専門士資格取得受験対策講座



### 2 当日の様子

#### (1) 「絵本の勉強会」

保育現場で司書をされている伊藤明美先生を講師としてお迎えし、絵本の選書と環境作りについてお話いただいた。

絵本の選書については、選りすぐりの絵本を子どもたちに提供することを強調され、様々な絵本を紹介してくださった。また、読み聞かせだけでなく絵本と共にある保育の実践例などを写真を交えて丁寧に紹介してくださった。特に「いきものづくし」の絵本に掲載されている「モノ」が描かれた絵本を集めて掲示して保育室に設置する環境づくりは参加者がとても興味を持って聞いていた。保育室のあらゆる場所に絵本を設置し、子どもが常に絵本を目にする機会を創出することの大切さを学ぶことができた。最後は、「かとりせんこう」の絵本の読み聞かせもしていただき、先生の声と読み方に引き込まれる幸せな時間を参加者の皆様と共有した。

#### (2) 「絵本専門士合格者お祝い贈呈式」

絵本専門士は、本学で取得できる認定絵本土の上位資格である。本学の卒業生は、認定絵本土資格取得後、3年以上保育現場で働くことにより資格取得のための試験を受けることができる。資格取得のための対策講座を昨年度から開催したが、その受講生、つまり本学卒業生から、絵本専門士認定資格取得試験に3名が合格し、絵本専門士が誕生した。合格のお祝いとして絵本専門

士登録費用の一部を交友会が援助してくださることになり、その贈呈式を絵本の勉強会の後に執り行った。絵本専門士は、合格したらそれで終わりではなく、常に「お話し会」などを企画していくことが課せられている。本学でもバックアップして敬愛フェスティバル時などに「お話し会」を開催することを検討している。

### (3) 「絵本専門士認定資格取得のための受験対策講座」

本学の非常勤講師の生田美秋先生による対策講座が行われた。開催にあたり絵本専門士に合格された卒業生から、合格のために実行したことなどの話があり、受講生は熱心に聞いていた。先生からは、認定絵本土のテキストの中で絶対に覚えておくことや試験で課せられるであろう内容についての助言があった。試験までの間も生田先生が疑問等に応じてくださることになっている。



「絵本の勉強会」



「絵本専門士合格者お祝い贈呈式」



「交流会」

「絵本専門士受験対策講座」

(文責：齋藤めぐみ)

# 子育て支援事業

## 1 事業の目的

- ①子育て親子と学生が交流し共に育つ場として機能できるようにする。
- ②地域で子育てをする親子同士の出会いの場作りも視野にいれ、地域での顔見知りを作る安心の場として機能できるようにする。
- ③教育機関として子どもたちの育ちに相応しい絵本やおもちゃ遊び等の情報提供の場として機能できるようにする。



## 2 実施概要

総合子ども学研究所所員の協力で、ブラッシュアップゼミ学生が主体となり「子育て支援ワークショップ・全9回」を実施した。実施概要は以下の通り。

### 【実施期間及び実施時間】

10月22日（水）より12月17日（水）10時50分から12時（水曜2限ブラッシュアップゼミの時間）

### 【場所】

敬愛大学・敬愛短期大学1号館6階 保育実習室

### 【子育て支援ワークショップ周知方法】

千葉市内の保育所、子育て支援施設、稲毛区保健福祉センター等に設置。  
敬愛フェスタ（学園祭）や敬愛大学・短期大学のHPにて周知。

子育て支援ワークショップ・全9回担当教員と実施内容

回数	日にち	担当ゼミ・内容
第1回	10月22日（水）	大野ゼミ 人形劇あそび
第2回	10月29日（水）	神永ゼミ パラシュートレインボーで遊ぼう
第3回	11月5日（水）	久保木ゼミ 絵本読み聞かせ・クレヨン遊び
第4回	11月12日（水）	池田ゼミ 空き箱で遊ぼう
第5回	11月19日（水）	池田ゼミ 感触遊びを楽しもう
第6回	11月26日（水）	齋藤ゼミ お母さんのための絵本講座・ブックトーク・絵本制作

第7回	12月3日（水）	吉村ゼミ	保護者の方に読んでいただきたいおススメ絵本&手作りおもちゃの紹介
第8回	12月10日（水）	藤川ゼミ	エプロンシアター・ふれあい親子あそび・風船で遊ぼう・手作りおもちゃを作ってみよう
第9回	12月17日（水）	酒井ゼミ	パネルシアター・親子遊び

### 【参加に際してのお願い事項】

#### 参加者

◇本事業の取り組みを広報活動の一環として使用したい旨を説明し、写真撮影の許諾を求めた。また、今後の学びにつなげるため、参加後に任意でアンケート回答（QRコード）を求めた。

#### 学生

◇授業の一環としての活動のため参加後アンケート回答（QRコード）を必須とした。

## 3 実施結果

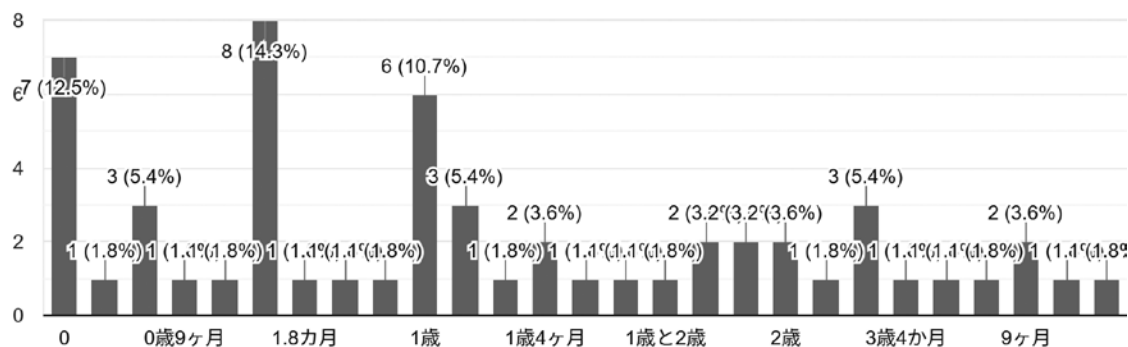
全9回を通しての延べ参加人数は以下に示す通りである。

養育者：158名、子ども：164名、見学者：4名

●アンケート結果（参加者）：回答率35%（56／158）

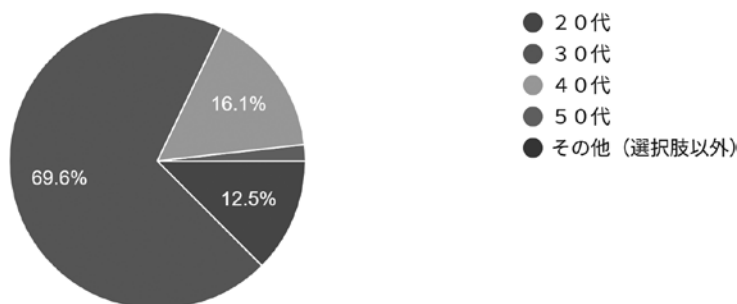
#### お子さんの年齢

56件の回答



#### 1. ご一緒にいらした方の年代

56件の回答



## 2. 本日の内容についてお答えください

56件の回答



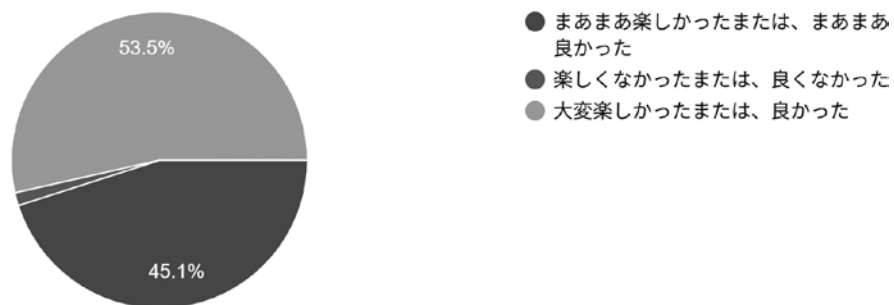
### 【感想（抜粋）】

- ・たくさん優しい学生さんたち、同じ年頃の子達と触れ合えてよかったです。
- ・いろいろなおもちゃがあり、楽しめました。手作りおもちゃだったり、珍しいおもちゃだったり、家庭ではなかなかできない遊びやダイナミックな遊び方ができて良かったです。
- ・親と離れて家族以外と遊ぶ経験が今までなかったため、遠くから見守りつつ学生さんにお任せできて、親にとっても子にとっても良い経験ができました。
- ・自宅保育で限られた人との関わりの中いろんな人が遊んでくださりいい刺激になりました。

### ●アンケート結果（学生）：回答率52%（71／136）

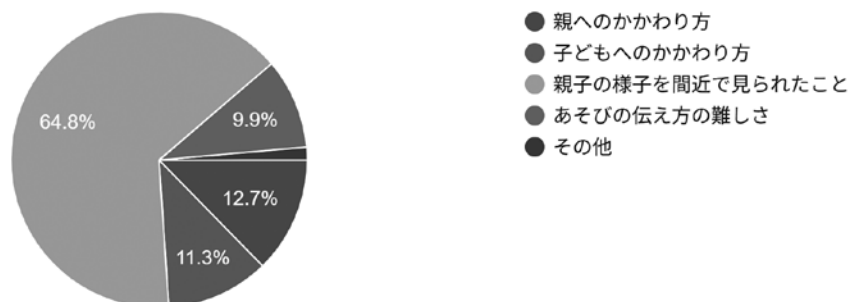
#### 1. 子育て支援ワークショップを实践していかがでしたか

71件の回答



#### 2. 子育て支援ワークショップを实践して学んだことについて、以下の項目から一つ選択してください

71件の回答



### 【学びの感想（抜粋）】

- ・実習等では見られなかったような親子の関わりや場所見知りしてしまう子どもへの親の対応などが見られた。
- ・保護者が子どもに対してどのように接しているのかを近くで見れたから。
- ・親子での関わりを見てとても微笑ましくなるほど、子どものことを理解しようとしている親の姿が印象的でした。
- ・なにより、保護者の方が楽しく嬉しそうに子どもの話をしている姿が見れたことがとても嬉しかったです。

### \*詳細については年報にて報告

子育て支援ワークショップに参加する子どもの年齢は、2歳未満児が中心であることが今回のアンケート結果から明らかになった。ワークショップ内容を検討するうえでは、学生にとっても大変貴重な情報となったと考えられる。また、養育者からの感想（抜粋）から、家庭以外で遊べる場所や同じ年代の子ども達と集う場を求めていることや我が子が親以外の大人と遊んでもらう体験や、子どもの遊びやおもちゃ・絵本の紹介や養育者向けの講座も求めていることが示された。学生にとっては、実習では経験できなかった「親子」の様子を身近で見る事が出来たことや直接保護者と会話が出来たことは、4月から保育者として働く学生にとっては何事にも代えがたい経験となったと推測される。



#### 4 今後の課題

アンケート結果から本事業の目的の①と②は概ね達成できたと推測される。しかし③の教育機関として求められる良質な玩具を用意することについては今後検討していく必要があると思われる。一方で、子育て支援ワークショップに参加した子どもの半数以上が2歳未満児ということもあり、乳児の生活リズムに合わせた開催時間や、衛生面・対応する学生の身なりの面で厳しい指摘をいただいた。保育者養成校が主催する「子育て支援ワークショップ」としてこれらの意見を参考にしながら前向きに検討していく必要がある。

(事業担当：齋藤めぐみ・藤川志つ子 文責：藤川志つ子)

## 高大連携教育

本学では、系列校4校（千葉敬愛高等学校、敬愛学園高等学校、敬愛大学八日市場高等学校、横芝敬愛高等学校）の他、千葉県内の公立高等学校との教育連携を推進してきた。昨年度末に市川南高等学校と連携協定を締結したことで、保育基礎コースを設置する4校全てと連携協定締結が実現し、保育人材の育成に取り組んでいる本学の取り組みが更に充実することとなった。なお、今年度は新たに船橋市立船橋高等学校との協定が締結され、計19高校と教育協定を締結している。

とりわけ今年度は、保育基礎コースを設置する県立高校4校との窓口を当研究所が務め、各校の保育基礎コース科目において本学教員が出前授業を担当するなど、多彩な取り組みを行った。

なお敬愛大学とのキャンパス統合に伴う組織改編に伴い、今年度は地域連携センターが教育連携校からの問い合わせ窓口を担った。

### （1）本学からの講師派遣

本学が2025年度中に高等学校に教員等を派遣した実績は、以下の通り。

派遣先	時期	内 容	担当教員
四街道北高等学校★	4/30・5/15	紙芝居の演じ方	酒井
	5/12	保育の意義と目標	藤川
	5/13	絵本の読み聞かせ	齋藤
	6/30	おはなし会グループ発表	齋藤
	10/7	子どもと運動	清水
	2/3	先輩にインタビュー～未来の自分をイメージしよう	(学生)* <sup>1</sup>
土気高等学校★	9/30	紙芝居の演じ方	酒井
市川南高等学校★	6/24	保育実習事前指導	酒井
安房高等学校	6/7	かかわりから考える～子どもの運動遊び	清水
成田北高等学校	7/10	保育園インターンシップ事前指導	小熊* <sup>2</sup>
千城台高等学校	7/11	保育園インターンシップ事前指導	吉村* <sup>2</sup>
我孫子高等学校	8/22	「こどもまんなか社会」ってなんだろう？	神永* <sup>3</sup>



四街道北高校



我孫子高校

## (2) 本学との連携による高校生の実習支援

派遣先	時期	内 容
市川南高等学校★	6/10・11	保育所での保育参加実習支援 (於：ときわ保育園 (市川市))
四街道北高等学校★	7/22～24	保育観察実習 (於：さくら敬愛保育園)
成田北高等学校	7月下旬	保育園インターンシップ (於：さくら敬愛保育園)

このうち市川南高校の例では、協定締結後初の試みとして、同校の所在する市川市内で本学の様々事業にご協力をいただいているときわ保育園の協力を得て、両日10名ずつ、計20名の生徒の参加実習の場を提供した。ただ子どもたちとふれあう体験をするだけでなく、同園で勤務する本学卒業生3名に話を伺う機会を設け、自らが保育者を志した理由や本学在学中の充実した経験、現在保育士として子どもたちと接する上で大切にしていることなどをお話いただき、参加した高校生の意欲に大きく繋げることができたと思われる。



(写真提供：ときわ保育園)

この他、本学系列校のうち、千葉敬愛高等学校と敬愛学園高等学校には、千葉市との連携講座として「保育者になるには体験」を7月に実施した。本事業については別頁（事業報告2）で詳しく報告されているので、ここでは省略する。

本学を設置する学校法人千葉敬愛学園では、「敬愛ビジョン2030」の中で「地域の伴走者」というキーワードを明示し、地域との関わりを重視し、地域から愛され、頼りにされる学園運営を実践することを謳っている。すなわち、学内教育での保育人材の育成に留まらず、社会に愛され、頼りにされる短期大学としての取り組みが求められているということだと認識している。高大連携教育は、ともすると学生募集のための手法のひとつと誤解されることがあるが、「こどもまんなか社会」という新たなキーワードが浸透しつつある現在、高校と大学・短大の教育連携が進むことで、「こどもまんなか」の考え方を高校生が学ぶ意義の理解が深まることが期待される。

高大連携教育の推進は、結果として、本学の「持続的に選ばれる保育者養成校を目指す」というメッセージにつながるものであり、今後も一層の推進が求められる。

(文責：藤森孝幸・地域連携センター長)

### ★保育基礎コース設置校

- \* 1 派遣先高校保育基礎コース卒業生（本学2年生）を派遣、\* 2 派遣先高校卒業生の本学2年生も同行、
- \* 3 派遣先高校卒業生の本学卒業生（現役保育士）も同行

# 千葉市連携事業「保育者になるには体験」

## 1 概要

平成25年12月24日、千葉市と敬愛短期大学は相互連携協定を締結した。本事業「保育者になるには体験」は、その協定に基づき実施したプロジェクトの一つである。

将来の進路を考えるうえで、実際の職場を見学し、活動に参加することは大きな意味をもつ。本事業では、保育の仕事に関心をもつ千葉敬愛高等学校および敬愛学園高等学校の生徒を対象に、千葉市公立保育所（轟保育所・千草台保育所）の協力のもと、保育現場での体験活動を行った。

### ○参加者

4月中旬に系列校の校長・教頭へ趣旨説明を行い、5月下旬よりウェブフォームで申込みを受け付けた。その結果、両校から22名（千葉敬愛高校15名、敬愛学園高校7名）の応募があった。

企画段階では「開催1週間前までに15名集まれば十分」と見込んでいたが、6月中旬には20名に達したため、千葉市幼保指導課のご尽力により受け入れ先を2か所に増やし、希望者全員が参加できる体制を整えた。

当日は、轟保育所に齋藤めぐみ教授、千草台保育所に大野が引率した。また、本学負担で傷害保険および賠償責任保険に加入し、不慮の事故に備えた。

## 2 当日の様子

開催日は7月15日（火）。梅雨末期の大雨となったが、交通機関に大きな乱れはなく、予定通り実施できた。以下は当日のスケジュールである。なお、風雨が非常に強かったため、一部の会場では保育所長と相談のうえ、日程を短縮した。

- 9:30 西千葉駅（轟保育所）、穴川駅（千草台保育所）に集合
- 10:00 保育所長より挨拶・諸注意
- 10:20～11:00 こどもたちとのふれあい（前半）
- 11:00 休憩
- 11:10～11:30 こどもたちとのふれあい（後半）
- 11:35～11:45 保育所長からの講話
- 11:45～11:55 アンケート記入・引率教員によるまとめ
- 12:30 各駅にて解散



### (1) 轟保育所

系列2校の3年生11名が参加した（申込み13名のうち2名が辞退）。  
引率した齋藤めぐみ教授によれば、参加者は明るく元気な生徒が多く、

- ・「体験がとても楽しかった」
- ・「けんかの場面でどう対応すべきか迷った」
- ・「保育者になりたい気持ちが強くなった」

など、前向きな感想が多く寄せられた。



### (2) 千草台保育所

1・2年生8名が参加した（申込み9名のうち1名が辞退）。

参加者は全員、定刻より早く集合し、男子生徒1名も熱心に活動に参加した。

園では「おみせやさんごっこ」やゲームが行われており、高校生も笑顔で積極的に子どもたちと関わっていた。



(※本ページの写真は画質を落として掲載しています。)

## 3 今後の展望

初めての取り組みであったが、保育所の協力体制と高校生の積極的な姿勢に支えられ、非常に意義深い事業となった。保育所の先生方や子どもたちとの関わりを通して得た学びが、保育者を志す生徒の増加につながることを期待したい。

2学期のはじめには、校長先生より参加者へ受講証明書が渡された。これが生徒のさらなる意欲向上につながるものと思われる。

今後も、体験を重視した学びの場を継続的に提供していきたい。



(文責: 大野雄子)

---

## Ⅱ 研究論文等

---



---

# 「劇遊びプロジェクト」の実践

～コラボレーション授業の取り組み～

大野 雄子・小熊 真弓

“Theatrical Play Project” in action

～Collaborative class initiatives～

Yuko OHNO / Mayumi OGUMA

核家族化が進む現在に於いて子どもたちが多くの年齢層に出会う機会は限られている。「こどもまんなか社会」の実現に向け地域の大学生が貢献できることは何か、また同時に保育者を目指す本学学生が子どもとのかかわりの中から学ぶことはどのようなことを考え、「劇遊びプロジェクト」を実施した。実施するにあたり、授業の展開方法に合理的な工夫を見いだした。同じ時期に同じプロジェクトに向け、複数の授業が協働し多面的な学びを展開できるようコラボレーション授業とした。保育所11か所、幼稚園1か所の協力のもと実施した「劇あそびプロジェクト」を学生アンケートから振り返り、コラボレーション授業について検証する。

## 1 はじめに

### (1) 「劇遊びプロジェクト」とは

近年、少子化や核家族化の進行に加え、地域社会における人間関係の希薄化が指摘されている。現在に於いて、子どもたちが多くの年齢層に出会う機会は限られている。そのような社会状況の中で、子どもたちが異なる年齢層と関わる機会は減少しており、育ちの環境としての課題となっている。

「こども大綱」に示された「こどもまんなか社会」の実現に向け、大学が地域社会にどのような貢献ができるかを検討することは、今日的な教育課題である。

本学では、地域の子どもたちと学生との世代間交流を目的とし、「劇遊びプロジェクト」を実施した。本プロジェクトでは、学生が授業内で学んだ内容をもとに劇やゲームなどの表現活動を創作・発表する機会を設けた。これにより、子どもたちにとっては日常の遊びへとつながる体験の場となり、また将来保育者を目指す学生にとっては、地域や保育現場と連携・協働する実践的な学びの機会となることを意図した。

### (2) コラボレーション授業について

「劇遊びプロジェクト」を実施するにあたり、学生の学びをより充実させるため、授業の展開方法に工夫を加えた。その一つが複数の授業科目によるコラボレーション授業である。同一時期に、教育的方向性の近い複数科目が、それぞれの授業目的や内容を保持したまま、一つのプロ

プロジェクトに向けて連携することで、多面的な学びを可能にする授業形態とした。

本実践では、1年次前期科目である「子どもと言葉」および「幼児理解の理論と方法」において発表内容の創作を行い、「敬愛スタートアップゼミ」において、ゼミごとに保育所および幼稚園に訪問し発表を行った。

## 2 コラボレーション授業の目的やねらい

### (1) 「子どもと言葉」からプロジェクトに向けての目的やねらい

「子どもと言葉」では、子どもにとっての言葉の役割や言葉を介した表現の重要性について学習している。劇に関する授業では、子どもが劇ごっこを楽しむ中で、遊びながら徐々にストーリーにそった劇を創っていく過程を学んでいる。本プロジェクトにおいては、学生が絵本や昔話など、子どもにとって親しみやすい物語を題材とし、劇遊びとして再構成・表現することを目的とした。

物語を「読む」「聞く」活動にとどまらず、「表現する」「伝える」活動へと発展させることで、言葉のやり取りや身体表現を通じたコミュニケーションのあり方を実践的に学ぶ機会とした。発表内容の概要を表1に示す。

表1 実践した劇

「おおきなかぶ」「しらゆきひめ」
「ももたろう」「うらしまたろう」
「おおきなかぶ」「三びきのやぎのがらがらどん」
「ももたろう」「おおきなかぶ」
「おおきなかぶ」「あかずきん」
「変身トンネル」「おおきなかぶ」
「三びきのこぶた」「三びきのやぎのがらがらどん」
「とんちゃんの大冒険（空編・大ピンチ編）」
「おおきなかぶ」「ねずみくんのチョッキ」
「おおきなかぶ」「とんとん泊めてくださいな」
「三びきのやぎのがらがらどん」「おおきなかぶ」

### (2) 「幼児理解の理論と方法」からプロジェクトに向けての目的やねらい

「幼児理解の理論と方法」では、幼児の発達段階や年齢差による認知・理解の特長について学習している。本プロジェクトでは、3歳、4歳、5歳の子どもたちの反応の違いに着目し、理論で学んだ内容を実践を通して確認することをねらいとした。

学生は、クイズ、手品、スイカ割り、ダンスなどの活動を通して、子どもがどのような点に興味を示し、どのように反応するのかを実際に体験した。これにより、年齢や発達に応じたかわりや言葉掛けの重要性について、具体的な手ごたえを持って理解することを目指した。発表内容および学びの主旨を表2に示す。

表2 「幼児理解の理論と方法」からの発表内容

内容	学びの主旨
手品	手品による変化を不思議ととらえる様子
スイカ割り	相手の立場に立ち、適切な言葉でガイドをする様子
忍者ダンス	動きと言葉に対する反応
○×クイズ	物事の理解の様子
エビカニクス（ダンス）	動きと言葉に対する反応
何が通ったでしょう	動きのあるものをとらえる様子
野菜動物クイズ	物事の理解の様子
トンボを飛ばそう	制作物を使い遊ぶ様子
絶対に言わないで	ネズミが「絶対に言わないでね」と言って隠れた場所を猫に教えてしまうかどうか

### 3 アンケートについて

#### (1) 調査対象者

調査対象者は、「子どもと言葉」および「幼児理解の理論と方法」を受講した1年生学生138名であり、そのうち125名からアンケートの回答を得た。

#### (2) 調査内容

「劇遊びプロジェクト」終了後、本活動に対する学生の評価および学びの内容を把握するため、アンケート調査を実施した。調査項目は以下の通りである。

1. 劇遊びプロジェクトの満足度
2. このプロジェクトで良かったことはどのようなことですか？（複数回答可）
3. （「子どもと言葉」について）このプロジェクトで学んだこと（自由記述）
4. （「幼児理解の理論と方法」について）今回の訪問で子どもの発達や年齢による反応の違いや面白いと思ったこと（自由記述）

### 4 アンケートの結果

プロジェクト終了後に実施したアンケート結果から、本活動に対する学生の評価および状況を把握した。自由記述については、科目担当教員が内容を精査し、代表的な意見を抽出・整理した。

#### (1) 劇遊びプロジェクトの参加の満足度について

「劇遊びプロジェクトの参加の満足度について」は、「満足できた」と回答した学生が88%、「少し満足できた」と回答した学生が11.2%であり、多くの学生が肯定的に捉えていることが明らかになった。

#### (2) 本プロジェクトで良かったことについて

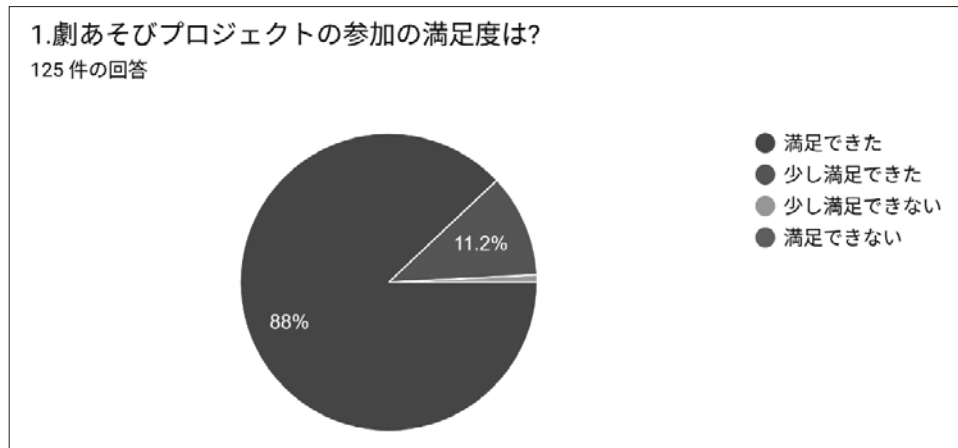


図1 劇遊びプロジェクトの満足度

「このプロジェクトで良かったことはどのようなことですか?」に対する結果は、「子どもの発達(言葉の理解、動き、反応)などを学んだ」94件 75.2%、「劇遊びや言葉について学んだ」86件 68.8%、子どもの保育が身近に感じられた81件 64.8%、ゼミでの会話が増えた65件 52%、「自分の責任感が増した」54件 43.2%、「何かを作り上げるのが好きになった」47件 37.6%であった。その他の意見として、「やる人とやらない人の差に気づいた」、「保育者の立場で子どもたちを考えることができた」、「園の先生の話し方、行動を学んだ」、「保育士の機転の利かせ方や言葉の言い回しを知れた」が挙げられた。

(3) このプロジェクトで学んだこと(「子どもと言葉」について自由記述)

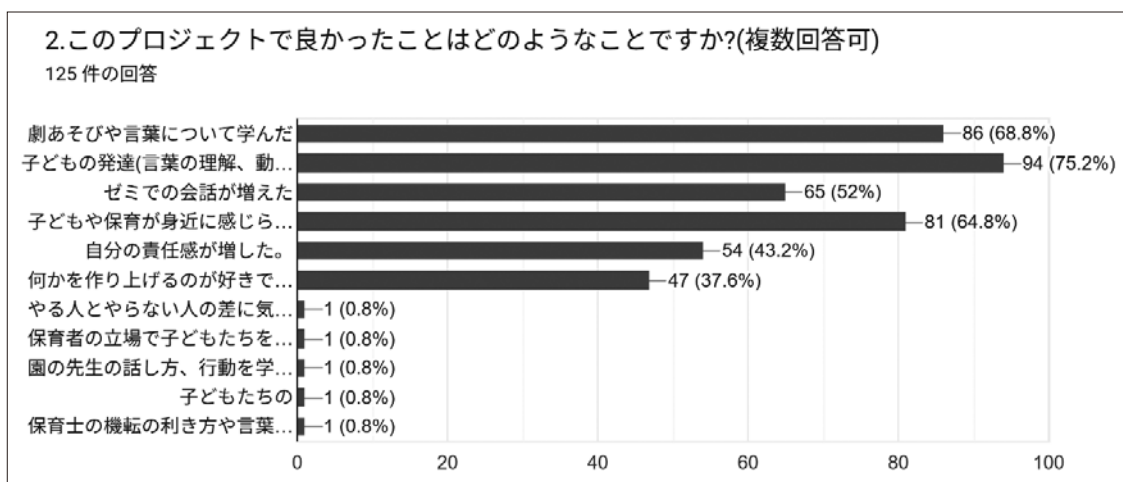


図2 本プロジェクトで良かったことについて

本回答については、自由記述であるため、多かった意見を抜粋する(表3)。

授業では劇の台詞や表現方法について考えて取り組んだが、実践を通して子どもがわかる表現の仕方や理解できる言葉の使い方、小道具の必要性などについて学ぶことができた。準備段階で練った案が実践の場では不足していたことがわかり、この経験を次に活かしたいという目標を持つことができた。また、実践を通して子どもの発達を理解することにも繋がった。

表3 「子どもと言葉」について本プロジェクトで学んだこと（抜粋）

<p>「子どもと言葉」のプロジェクトで劇を発表したことで、子どもが言葉を通して思いを伝え合ったり、役になりきる中で表現力やコミュニケーション力を育む大切さを学びました。また、友だちと協力して一つのものを作り上げる楽しさや達成感も感じました。</p>
<p>劇のセリフをいう時に子どもに伝わりやすい表現にしたり「僕は～だよ」と説明をすることで子どもに何役なのか伝わりやすくなるということを知りました。またセリフを言う時にその役になりきって言うことで役柄が入ってきやすく子供たちも楽しくみることができるので良いと思います。劇を自分がすることで普段とはまた違った言葉遣いを覚えることが出来たり役にあった表現の仕方が身につくと思うので劇をすることは大切なことだと思いました。最後帰る時に、「帰らないで また劇やりにきてくれる？」などと言ってくれてすごく嬉しかったです。とてもいい経験になりました。</p>
<p>ただ役を演じるだけでなく、子どもたちに伝わりやすい台詞を入れたり、掛け声を子ども達にも一緒に言ってもらったりと子ども達に楽しんでもらえるように工夫を加えることで子ども達にもより楽しんでもらえると学びました。また、子どもたちに楽しんでもらうためには、自分たちも楽しんで取り組むことが大切だと思いました。</p>
<p>「これは何かな？」という問いかけにちゃんと答えてくれたり、一緒に歌ってくれる？と言うと「良いよー！」と元気な返事が返ってきて純粋に反応してくれました。頑張った衣装も「可愛い～」と言ってくれ、頑張った事が子供に伝わって良かったです。とんぼを子供達に渡した時にとんぼを入れる為の袋を用意して下さり、幼稚園の先生方の臨機応変な対応が学びになりました。</p>
<p>劇を通して、子ども達は繰り返しや抑揚のある話し方に興味をもつことを学びました。繰り返しの言葉、繰り返しの出来事に子ども達はとても集中して見ていました。小道具も良く見てくれて嬉しかったです。劇中に子ども達も参加できるようなものだとより積極的に参加してくれることが分かりました。</p>
<p>まず、2人で会話をしているところの場面では演じている私たちが向かい合うのではなく、子どもたちの方を向くことを学び、常に子どもたちにどう見えているのかを考えることの大切さを学びました。声も子どもたちは皆静かに聞いているわけではないので、リハーサルよりも大きな声を出さないといけないことを学びました。頭だけで想像して、練習しても実際に子どもたちの前でやると全く違うことを学んだし、この経験があるからこそ次に活かせると思いました。実際に劇をしてみても、子どもたちの注目を集めるときは、声の強弱に気をつけることが大切だと学びました。あと、歌をつけると子どもたちも飽きずに、見ることができると学びました。</p>
<p>劇中に童謡を入れることで、ただみるだけの劇ではなく、歌で参加できる劇にすることができるとことを学んだ。歌の時は大きな声で歌ってくれて、セリフを喋っている時は真剣に見ていて、子どもはすごいなと思った。子ども達に問いかけた言葉がきちんと返ってきて、普段保育者が応答的な関わりをしていることに気づいた。私たちの用意した劇で、子どもたちがニコニコ笑顔になってくれて本当に良かった。</p>
<p>劇を作る上でも、どんな言葉を使えば、子どもたちが理解しやすいかや、子どもの興味が引けるかを考えて取り組むことが出来たので、子どもと言葉について考えることが出来た。また、子供たちの前で実際にやってみて、反応がいいところや、思っていた反応と違うところがあり、子どもたちの感性と大人の想像は結構変わってくると思った。</p>

練習の段階では緊張していたけど当日は逆に想像より子どもたちが前のめりに見て声を出してくれていて暖かい雰囲気だったので堂々とできたかなと思います。劇を作る段階で、どうしたら子どもたちに楽しんでもらえるか物語に入り込んでもらえるかをみんなで話し合っ「うんとこしょどっこいしょ」の入れ方、言い方を歌に合わせてやっていたものからセリフにして子どもたちが一緒に参加できるように工夫したりしました。登場しないところは両端の段ボールの裏にみんなで隠れていたのですが、意外と子どもたちはそこも見ていて「見えてる！」と笑っていたり一緒に「うんとこしょどっこいしょ」を自然と言ってくれたり、問いかけにちゃんと返事をしてくれたり思っていたより楽しそうに劇を見てくれて参加してくれて、子どもの視点や様子、無邪気さなど沢山学ぶことができました。

(4) このプロジェクトで子どもの発達や年齢による反応の違いや面白いと思ったこと（「幼児理解の理論と方法」について自由記述）

本回答については、自由記述であるため、多かった意見を抜粋する（表4）。

授業で習ったことを実際に保育現場で確認し、3歳から5歳の反応の違いを確認できたことや、自分たちの投げかけに対し子どもたちが思いもよらない反応をしたこと、その反省から自分たちの言葉掛けの改善点を考えるという内容が多く、子どもへの興味や好意の成長が見られた。

表4 本プロジェクトで子どもの発達や年齢による反応の違いや面白いと思ったこと（抜粋）

3歳と5歳の子の発達の違いを知ることができた。スイカ割りをした時に、3歳の子は場所を伝えることがあまりできなくて、5歳の子は具体的に伝えていて、言葉の発達を知ることができた。最初は劇で反応してくれるか不安だったけれど、実際にやってみるとたくさん反応してくれて良かった。スイカ割りをしているときに、3歳の子は立ち上がって動いていたけれど、5歳の子は座って参加していて反応の違いや動きが違って面白かった。

私たちはスイカ割りをしたのですが、授業で習ったとおり、年齢の低い子どもたちは「そっち！」や、指を指して教えていた子どもが多かったです。年齢が低い子どもはまた相手の立場で物事を考えることができないことを確認できました。だんだん歳が高くなるにつれて、落ち着いて相手から見えてどっちや、左右をきちんと伝えられていて、すごいと思いました。1歳しか変わらないのにこんなにも差が出ることを感じ、子どもの成長の速さを感じました。しかし、同じ年齢でも指示の仕方に個人差があったり、中には「がんばれ！」しか言わない子どももいて、個性が出ていて面白いと思ったし、その場にいた保育者は誰も指摘したりせず見守っていたので、その姿勢からの学びが多かった。子どもの発達は年齢に左右されすぎないことも大切だと思いました。

ねずみとねこの「絶対に言わないでね」の導入を行ってみると、3、4歳はねずみの逃げている家を教えてしまいましたが、5歳になると優しさで嘘をつき、ねずみを猫から守ろうと逃げていない家を教えていた。年齢によってこんなにも差がでるのだと実感しました。ですが3、4歳の中にも嘘をついてくれている子がいたので、一人ひとり成長のスピードが違うとはこういうことなんだと改めて気づくことができました。

スイカ割りをした際に、3歳児クラスの子達が本当に「真ん中！！」と言っていて、3歳児はまだ自分を中心として周りを見ているのだと思った。4歳児の時には右左はまだ少ないものの、前後の感覚を使って頑張って教えているのが可愛かった。5歳児は右左も使っていて、もう少し右など具体的な言葉も出てきていたのですごいと思った。目隠しをして、スイカを割る役をやった時に、子どもたちの声が大きすぎて指示が聞こえなくて面白かった。

マジックは、すべての年齢の子どもたちが水の色が変わる瞬間に驚き、目を輝かせていました。特に5歳児は「どうして?」「何入れたの?」と仕組みに興味を持ち、考えたり推測したりする様子が見られ、探求心の発達を実感しました。

スイカ割り教えてくれる子どもを年齢別に分けたかったが、手を上げてもらってこの学年以外はしーだよと声をかけたのにもかかわらず、色々な学年の子が参加していた。その中でも年長児は相手の右左に気づけていて誘導をしてくれて、年中児は前前前!ちがう!と全力で誘導してくれて年少児は頑張れー!と応援してくれていた。年中さんになるとゲームのルールがわかるようになり年長さんになるとしっかりと遊べるという印象であった。また、年長児にスイカを割ってもらった時はみんながスイカに当たらなくても当たっても拍手をしていて温かいなと思った。たった2学年違うだけで理解度とし参加度が違っていて観察していてとても面白かった。

縦割り保育だったのですが、年長さんが年少さんの面倒をととてもよく見ていて、兄弟で下の子がいない子でも縦割り保育を通して下の子の面倒を見るという機会を得ることが出来るので良いと感じました。

ねずみとねこの「絶対に言わないでね」を行い、各年齢に赤い家と青い家どっちに隠れたかな?と質問してみると1.2歳は答えられず、3.4歳の多くはねずみが隠れている方を言ってしまって、5歳は本当の方を言う子がいれば、ねずみを助けようと反対の方を教える子どももいて、やっぱり年齢によって反応が異なるのがおもしろいし勉強になった。途中で黄色帽子の子たちどっちに隠れたかな?と問いかけると赤!青!と答えていた子たちが帽子の色につられて黄色!と言ってしまっていたのがとてもかわいくて面白かった!

異年齢保育だったので、特に忍者ダンスでは俊敏性や集中力などから年齢による発達の違いを感じました。

3歳の子たちは気になるけど見ているだけで近くに来ない。4、5歳は気になって話しかけてきてくれたり、「何これっ」と気にかけてくれるので、そこに違いを感じました。最後にハイタッチをしてくれてみんな2つの手を出して待っていたけど、子供達は1つの手で2つの手を叩いてくれてとても可愛くて面白いなって思いました。

劇の導入としてエビカニクスを踊りました。踊り終えた後、子どもたちの盛り上がり度が高く、次の活動(手遊び)に移行する際、気持ちを切り替えるのに苦戦しました。また、劇を終えた後、子どもたちとブロックで遊びました。3歳の子たちはそれぞれ別のものを作り楽しんでいましたが、5歳になるとお家など大きな作品を皆で作る傾向があるのだと気づきました。子どもたちとたくさん関わることができ、とても楽しい1日になりました!

私は何が通ったでしょうというゲームをしました。園児たちに「答えがわかっても大きな声で言わないでね」と事前に言うおいても、やはりいいなくなってしまうようで、わかった子から次々答えが出てしまった。「確かに答えが分かったら自分が先に答えたい!」と思って言うだろうな」と改めて子どもの正直さを学んだ。

## 5 考察

### (1) 子どもとの直接的相互作用がもたらす学習効果

本プロジェクトにおいて学生が得た学びの特徴として、授業で習得した知識が、子どもとの直接的な相互作用を通して「実感を伴った理解」へと転換されるという点が挙げられる。筆者としては、この回数が多いほど学びが深化するものと考え。従来、保育者養成課程における発達理解や言語表現の学習は、講義中心の知識伝達型に偏りやすい傾向が指摘されてきた。しかし、本実践では、学生が子どもの反応を観察し、活動の進行に応じて言葉掛けや表現方法を調整する必要に迫られたことで、知識が状況的文脈の中で再構成される過程が確認された。

特に、劇遊びやクイズ、スイカ割りなどの活動において、子どもたちの言語理解・注意の持続・社会的視点取得の発達段階が明確に表出し、学生は年齢差や個人差の具体的な現れを体験的に理解した。これらの経験は、保育者に求められる「応答的関わり」「観察に基づく判断」「臨機応変な対応」といった専門的技能の基盤形成に寄与したと考えられる。

また、子どもたちの素直な反応や積極的な参加は、学生にとって大きな励みとなり、保育者を志す動機づけを強める効果も確認された。これは、実践的な学びが学生の自己効力感を高め、専門職としてのアイデンティティ形成に寄与することを示している。

### (2) コラボレーション授業が創出する学習の多層性

本プロジェクトのもう一つの意義は、複数科目が連携するコラボレーション授業の教育効果である。大学の授業は科目ごとに独立して実施されることが多く、学びが断片化しやすいという課題がある。しかし、本実践では、「子どもと言葉」「幼児理解の理論と方法」「スタートアップゼミ」が共通のプロジェクトを軸に連動することで、学生の学習が多層的に統合された。コラボレーション授業は、以下の点で教育的意義が大きい。

#### 1) 学びの相互補完

言葉表現の学び（劇遊び）と発達理解の学び（年齢差による反応の違い）が、実践の場で結びつくことで、学生は「なぜこの言葉掛けが必要なのか」「どのような表現が子どもに届くのか」を多角的に検討することが可能となった。これは、学習内容が単なる知識の寄せ集めではなく、実践的文脈の中で意味づけられることを示している。

#### 2) 協働的学習の促進

複数科目で同一プロジェクトに取り組むことで、学生間のコミュニケーションが活性化し、計画性や臨機応変な対応が見られ、役割分担や意見交換が生じた。これは、保育現場で求められるチーム保育の基礎的経験と位置付けられ、協働的問題解決能力の育成に寄与したと考えられる。また、子どもの想定を超える反応を直接感じ取り、その一つ一つから更なる課題を発見することができた。

#### 3) 学習プロセスの構造化

「授業内での学習→グループでの創作→現場での実践→振り返り」という一連の学習プロセスが明確に構造化されたことで、学生は学びをプロセスとして捉え、経験を内省的に統合することが可能になった。特に学生の経験的、自発的な学ぶ点においては、Kolb (1984) による「経験学習モデル (Experiential Learning Theory)」とも親和性が高い。Kolbは、学習とは経験を

基盤として進行する循環的プロセスであると捉え、①具体的経験、②省察的観察、③抽象的概念化、④能動的実験の4段階を示し、これらの循環が学びの深化につながるとした。本プロジェクト事例に当てはめると以下ようになる。

- ①具体的経験：学生が子どもと関わる
- ②省察：子どもの反応を振り返る
- ③抽象的概念化：発達理論や言語表現の知識と結びつける
- ④能動的実験：次の活動や言葉掛けに活かす

### (3) 今後の学びと展望

本プロジェクトは多くの教育的成果を示した一方で、いくつかの課題も明らかになった。第一に学生の主体性や準備への取り組みには個人差が見られ、グループ内での役割偏在が生じる場面があった。第二に、訪問先の環境や子どもの様子、人数が不明確であったため、事前の打ち合わせの必要性を感じた。学生の力量と臨機応変な態度の有無により、発表内容にばらつきが生じてしまった。

今後は、学生がより主体的に関与できるよう、事前指導の充実、グループ編成の工夫、振り返りの質的向上など学習支援の枠組みを強化する必要がある。また、地域の保育施設との連携を継続的に深化させ、大学と地域が協働して「こどもまんなか社会」を実現する教育モデルとして発展させることが期待される。

### おわりに

本プロジェクトを実施するに当たり、附属幼稚園、地域の保育所 全12園のご協力をいただいた。子どもたちの素直な反応から参加した学生は、こどもまんなか社会を意識し充実感や保育を志す更なる意欲に繋がった。この場を借りて心より感謝の意を表す。

### 参考文献

David A.Kolb (1984) *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*  
Prentice Hall / FT Press



# 保育における絵本の位置づけと保育者を対象とした 絵本の研修会のあり方の検討

齋藤 めぐみ・吉村 真理子

A Study on the Role of Picture Books in Early Childhood Education and  
Picture Book Training for Educators

Megumi SAITO / Mariko YOSHIMURA

キーワード：絵本 保育実践、選書、保育者研修会、保育所保育指針

本研究は、保育における絵本の位置づけを「保育所保育指針」に基づき整理するとともに、先行研究を概観し、保育者を対象とした絵本の勉強会のあり方を検討した。分析の結果、絵本は発達段階に応じて役割を変化させながら、保育者との相互的な関係を基に言葉、社会性、感性、表現の育ちを支える存在であることが確認された。また、効果的な研修には、実践事例の共有や対話的な学びを取り入れることが重要であることが示唆された。

## はじめに

令和5年度文部科学省委託調査研究事業「幼児教育に関する大規模縦断調査」令和5年度予備調査（2023予備調査）結果（分析対象者238名のうち、5歳児（年長児）のクラスを担当する回答者は213名（89.5%）、4歳児と5歳児の両方を担当する回答者は25名（10.5%））によると全国の約72.7%の幼児教育・保育施設において「ほぼ毎日読み聞かせが実施」されていると報告されている。

一方で、同調査によると、保育者が過去12か月に専門性向上のために参加した活動（研修等）のうち多かったものは、「幼保小連携・接続」（55.8%）、「特別な支援を要する子どもの保育」（53.7%）、「主体的な遊びへの援助・環境構成」（48.1%）、「幼児期の発達心理」（42.4%）、「健康衛生・安全管理」（35.5%）、「運動発達や体をつかった遊び」（35.1%）であり、「言葉と絵本」の研修は14.3%と13ある研修の種類中、下位から3番目と低い割合であった。

ほぼ毎日、乳幼児が目にする絵本は乳幼児に大きな影響を与える。絵本は、心の脳を育てる（泰羅、2009）、という研究もある。「クシュラの奇跡」では重い障がいをもつ少女クシュラが、絵本との出会いを通して心とことばの世界を広げていく姿が描かれている。いずれにしても乳幼児の育ちに大きな影響を与える絵本の取り扱いには慎重に行う必要があり、そのための研修も必須であると考えられる。

仲本（2015）は、読み合う活動中に養育者や保育者にとってどのような知識や技術が必要であるのか、読みあいや読み合う活動に有効なねらいや保育方法とは何か等に関する研究的示唆が少ない、と示唆し、絵本を読みあう活動のための保育者研修プログラムを開発している。

著者が所属している敬愛短期大学は認定絵本土資格取得の制度が整い、絵本の蔵書も1万冊以上、と絵本の学びに重点をおいている。2025年度から卒業生を中心とした現役保育者対象に絵本の勉強会も開始したが、絵本の勉強会のあり方を検討していない。本学独自の保育者対象の絵本の勉強会を今後検討する必要がある。

そこで本研究では、本学独自の保育者対象の絵本の勉強会を検討する基礎資料とするため、「保育所保育指針」に基づき保育における絵本の位置づけを整理し、あわせて先行研究を概観することで、保育者を対象とした絵本の研修会のあり方を検討することを目的とする。

## 研究1：保育の中での絵本の位置づけ

目的：「保育所保育指針」を基に保育における絵本の位置づけを明らかにする。

方法：「保育所保育指針解説」中、領域の「ねらい」「内容」「内容の取り扱い」から、乳児、1～3歳児、3歳児以上別に絵本が示されている箇所を抜粋し、子どもにとっての絵本の役割を考察した。

結果：乳児、1～3歳児、3歳児以上別に絵本が示されている部分を抜粋し、下記に記した。

### （1）乳児

社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」

受容的・応答的な関わりの中で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う。

内容の取り扱い：

②この時期（9ヶ月を過ぎる頃）、子どもの喃語や指差しなどを、保育士等が受け止め、共感し、言葉に置き換え伝えていくことが、子どもの言葉を育て、人とやり取りすることの喜びと意欲を育むことになる。保育士等と一緒に絵本を楽しむことは、こうした経験を重ねていくことでもある。絵本は、絵に描かれた状況や感情を共有することを通して子どもと保育士等のやり取りを生み出し、子どもの言葉に応じて、保育士等が言葉を補いながら楽しく言葉のやり取りを展開していくことを可能にする。

精神的発達に関する視点「身近なものに関わり感性が育つ」

身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培う。

内容：

①身近な生活用具、玩具や絵本などが用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心をもつ。

保育士等に絵本を読んでもらっている時、知っているものの絵を見付け、指差してその喜びを保育士等に伝える。また、気に入ったページを何度もめくって前後の展開を繰り返し楽しんだり、語りの声の調子やフレーズに耳を傾け、その音の響きやリズムに合わせて体を揺らしたり自分も声を出したりする。そうした子どもの様子に、保育士等も温かく応答し、その味わっている世界を共有する。このように、諸感覚を使いながらものを介して身近な人と心を通い合わせる経

験が、更に身の回りの様々な環境への興味や好奇心を旺盛にかきたてる上での支えにもなる。

③保育士等と一緒に様々な色彩や形のものや絵本などを見る。

一緒に色や形などを楽しみながらその感覚の世界に浸り、自らの感覚を研ぎ澄ましていくこともある。絵本の中に身の回りのものを見つけて、絵本のイメージの世界と日常の世界を行ったり来たりする経験は、ふりや見立てを楽しむその後の象徴遊びにもつながっていく。保育の環境を構成するに当たっては、一人一人の子どもの発達過程や興味を考慮した絵本やものなどを選ぶよう心がけたい。

## (2) 1歳以上3歳未満児

身近な環境との関わりに関する領域「環境」

周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

内容：

②玩具、絵本、遊具などに興味をもち、それらを使った遊びを楽しむ。

心身の発達に支えられてものを使った遊びの幅が大きく広がりを見せる中で、子どもは身の回りに用意された玩具や絵本、遊具などに興味や関心をもち、いろいろなものに自分から触れ、それらで繰り返し遊ぶ。保育所や家庭、地域での日常生活において実際に経験したことと、玩具や遊具等で見立てたり絵本で読んだりしたイメージとを結び付け、自分なりの遊びの世界を豊かに広げていく。

④自分の物と人の物の区別や、場所的感覚など、環境を捉える感覚が育つ。

遊びの場面でも、じっくり集中して玩具や絵本を楽しみたい時、園庭やテラス、廊下など空間の構成やそこにあるものを活用して遊びたい時など、自分のしたいことや今興味のあることをするのに適したお気に入りの場所を自分なりに見付けて、遊び込む姿がある。

→絵本をゆっくり見られる場所

⑤身近な生き物に気付き、親しみをもつ。

姿かたちなどの特徴的な部分をはじめ、絵本や映像などを通して見知っていた生き物のイメージが、実物に触れることで更に鮮明になり、その生き物に対する認識が具体的で豊かなものになる。

言葉の獲得に関する領域「言葉」

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

ねらい：

③絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。

内容：

④絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ。

絵本や紙芝居は、子どもに新たな言葉との出会いをつくり、言葉の感覚や語彙を豊かにするとともに、子どものイメージの世界を広げる。この時期の子どもは、言葉の意味を理解して楽しむというよりも、言葉そのものの音やリズムの響きがもつ面白さを繰り返し楽しむことが多い。気に入った絵本や紙芝居は、保育士等に何度でも繰り返し読んでもらうことを求め、そこに出てく

る簡単な言葉を自分から口ずさむようになる。読んでもらって耳にした言葉を自分の中に取り込み、自分もその言葉を使うことを楽しむようになるのである。繰り返し読んでもらうことで、子どもは登場人物の真似をしたり、身体で表現したりして遊ぶようになる。

内容の取り扱い：

この時期、子どもと一緒に絵本を開けば、子どもが犬の絵を指差しながら「ワンワン」と言ったり、象の絵を指差しながら「コレ、ナーニ？」と尋ねたりする。「ワンワンだね。しっぽ、フリフリしているね。」「象さんだね。お鼻が長いね。」と、子どもの言葉に、保育士等が丁寧に言葉を補いながら返すことで、子どもの言葉は豊かになり、言葉で捉える世界も広がる。体験した出来事や、絵本などの物語を記憶し、それをイメージとして再現できるようになると、子どもは、ごっこ遊びを盛んに楽しむようになる。

感性と表現に関する領域「表現」

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

内容：

④歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。

子どもは、保育士等の歌うわらべうたなどの耳になじみやすい音の響きやゆったりとした調べに安らぎを感じる。また簡単な手遊びなどを通して、保育士等とのやり取りを楽しむ。

自然と歌や動作などを覚えて、心が解放されている時や、絵本や散歩で見かけた風景や動物などが歌のイメージと重なっている時に、自ら口ずさむこともある。

⑤保育士等からの話や、生活や遊びの中での出来事を通して、イメージを豊かにする。

イメージする力が育ってくると、この時期の言葉の育ちにも支えられて、保育士等に簡単なストーリーの絵本を読んでもらいながら、現実の世界を絵本の中に見いだしたり、絵本の世界を現実の世界で再現したりもし始める。また、繰り返しのパターンなどから話の展開をある程度予測し、先を楽しみにしながら聞くといった姿も見られるようになる。

(3) 3歳以上

身近な環境との関わりに関する領域「環境」

周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

内容：

⑩日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。

絵本や手紙ごっこを楽しむ中で自然に文字に触れられるような環境を構成することを通して、文字が様々なことを豊かに表現するためのコミュニケーションの道具であることに次第に気付いていくことができるよう、子どもの発達に沿って援助していく必要がある。

言葉の獲得に関する領域「言葉」

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

ねらい：

①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。

③子どもが絵本を見たり、物語を聞いたりして楽しみ、言葉の楽しさや美しさに気付いたり、想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡らし、その思いなどを保育士等や友達と共有したりすることが大切である。

内容：

④人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。

保育士等の説明を聞いたり、絵本を読むのを聞いたり、遊びの中で友達の要求や考えを聞くこともある。時には、保育所を訪問してきた人々の話を聞く……このような話を聞くことに関わる様々な体験を積み重ねることを通して、相手が伝えようとしている内容に注意を向けることへの必要感を持ち、次第に子どもは話を聞けるようになっていく。

⑦生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。

保育所の生活において絵本や物語などの話や詩などの言葉を聞く中で、楽しい言葉や美しい言葉に出会うこともある。

⑨絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。

子どもは、絵本や物語などで見たり、聞いたりした内容を自分の経験と結び付けながら、想像したり、表現したりすることを楽しむ。一人で絵本を見て想像を巡らせて楽しむこともあれば、保育士等が絵本や物語、紙芝居を読んだり、物語や昔話を話したりすることもある。皆でビデオやテレビ、映画などを見ることもある。家庭でもこのような絵本や物語を保護者に読んでもらったり、テレビやビデオを見たりするが、保育所で保育士等や友達と一緒に聞いたり、見たりする時には、皆で同じ世界を共有する楽しさや心を通わせる一体感などが醸し出されることが多い。また、家庭ではどちらかという自分の興味のあることを中心に見たり、読んだりすることになるが、保育所では保育士等や友達の興味や関心にも応じていくので幅の広いものとなる。家庭ではなかなか触れない内容にも触れるようになっていく。このようにして、保育士等や友達と共に様々な絵本や物語、紙芝居などに親しむ中で、子どもは新たな世界に興味や関心を広げていく。絵本や物語、紙芝居などを読み聞かせることは、現実には自分の生活している世界しか知らない子どもにとって、様々なことを想像する楽しみと出会うことになる。登場人物になりきることなどにより、自分の未知の世界に出会うことができ、想像上の世界に思いを巡らすこともできる。このような過程で、なぜ、どうしてという不思議さを感じたり、わくわく、ドキドキして驚いたり、感動したりする。また、悲しみや悔しさなど様々な気持ちに触れ、他人の痛みや思いを知る機会にもなる。このように、幼児期においては、絵本や物語の世界に浸る体験が大切なのである。

⑩日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

保育所の生活の中で、名前や標識、連絡や伝言、絵本や手紙などに触れながら、文字などの記号の果たす機能と役割に対する関心と理解が、それぞれの子どもにできるだけ自然な形で育っていくよう環境の構成に配慮することが必要である。

内容の取り扱い：

- ②子どもが自分の思いを言葉で伝えるとともに、保育士等や他の子どもなどの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。

活動を始める前やその日の活動を振り返るような日常的な集まり、絵本や物語などのお話を聞く場面などを通して、皆で一緒に一つのまとまった話を集中して聞く機会をもつことで、聞くことの楽しさや一緒に聞くことで生まれる一体感を感じるようになる。子どもが集中して聞けるようになっていくためには、話し手や話の内容に興味や関心をもつことができるように、落ち着いた場を設定し、伝え合うための工夫や援助を行い、保育士等も子どもと共に聞くことを楽しむという姿勢をもつことが大切である。

- ③絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。

子どもは、その子どもなりの感じ方や楽しみ方で絵本や物語などの世界に浸り、その面白さを味わう。絵本の絵に見入っている子ども、物語の展開に心躍らせている子ども、読んでくれる保育士等の声や表情を楽しんでいる子どもなど様々である。保育士等は、その子どもなりの感じ方や楽しみ方を大切にしなければならない。また、子どもは、絵本や物語などの中に登場する人物や生き物、生活や自然などを自分の体験と照らし合わせて再認識したり、自分の知らない世界を想像したりして、イメージを一層豊かに広げていく。そのために、絵本や物語などを読み聞かせる時には、そのような楽しさを十分に味わうことができるよう、題材や子どもの理解力などに配慮して選択し、子どもの多様な興味や関心に応じることが必要である。子どもは、絵本や物語などの読み聞かせを通して、子どもと保育士等との心の交流が図られ、読んでもらった絵本や物語に特別な親しみを感じるようになっていく。そして皆で一緒に見たり、聞いたりする機会では、一緒に見ている子ども同士も共感し合い、皆で見る楽しさを味わっていることが多い。そうした中で、一層イメージは広がっていくので、皆で一緒に見たり、聞いたりする機会にも、落ち着いた雰囲気をつくり、一人一人が絵本や物語の世界に浸り込めるようにすることが大切である。また、子どもは、保育士等に読んでもらった絵本などを好み、もう一度見たいと思い、一人で絵本を開いて、読んでもらった時のイメージを思い出したり、新たにイメージを広げたりする。このような体験を繰り返す中で、絵本などに親しみを感じ、もっといろいろな絵本を見たいと思うようになっていく。その際、絵本が子どもの目に触れやすい場に置かれ、落ち着いてじっくり見ることができる環境があることで、一人一人の子どもと絵本との出会いは一層充実したものとなっていく。そのために、保育室における子どもの動線などを考えて絵本のコーナーを作っていくようにすることが求められる。

- ④子どもが生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。

絵本や物語、紙芝居の読み聞かせなどを通して、お話の世界を楽しみつつ、いろいろな言葉に親しめるようにすることも重要である。特に語り継がれている作品は、美しい言葉や韻を踏んだ

言い回しなど子どもに出会わせたい言葉が使われていることが多い。繰り返しの言葉が出てきて、友達と一緒に声を出して楽しめるものもある。お話の世界を通していろいろな言葉と出会い親しむ中で、自然に言葉を獲得していく。言葉を獲得する時期である幼児期にこそ、絵本や物語、紙芝居などを通して、美しい言葉に触れ、豊かな表現や想像する楽しさを味わうようにしたい。

#### 感性と表現に関する領域「表現」

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

ねらい：

①いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

子どもは音楽を聴いたり、絵本を見たり、つくったり、かいたり、歌ったり、音楽や言葉などに合わせて身体を動かしたり、何かになったつもりになったりなどして、楽しんだりする。これらの表現する活動の中で、子どもは内面に蓄えられた様々な事象や情景を思い浮かべ、それらを新しく組み立てながら、想像の世界を楽しんでいる。

内容の取扱い：

①豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の子どもや保育士等と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。

子どもの豊かな感性は、子どもが身近な環境と十分に関わり、そこで心を揺さぶられ、何かを感じ、考えさせられるようなものに出会って、感動を得て、その感動を友達や保育士等と共有し、感じたことを様々な表現することによって一層磨かれていく。そのためには、子どもが興味や関心を抱き、主体的に関われるような環境が大切である。このような環境としては、子ども一人一人の感動を引き出せる自然から、絵本、物語などのような子どもにとって身近な文化財、さらに、心を弾ませたり和ませたりするような絵や音楽がある生活環境など幅広く考えられる。

考察：

研究1の目的は「保育所保育指針」を基に保育における絵本の位置づけを確認することであった。

乳児にとって絵本は、子どもと保育者が心を通わせる場であると同時に、環境への興味や表現の元を育てる存在であるといえる。絵本を介した保育者とのやり取りの中で、子どもは指差しや喃語など、自分なりの表現を受け止めてもらう経験を重ね、伝える喜びや大人への信頼感を育む。乳児は、絵本の中に知っているものを見つけたり、声の調子やリズムを楽しんだりしながら、絵本のイメージと日常生活とを行き来する。保育者がその感じ方に寄り添い、共に味わうことで、子どもの感性はさらに深まり、見立てや象徴遊びへと発展していく。

保育者は、子どもの発達や興味に応じた絵本を選び、共に楽しみ、共有する関わりを通して、発達を支えていくことが求められる。

1歳以上3歳未満児にとって絵本は、身近な環境への好奇心や探究心を広げ、生活経験とイメージの世界をつなぐ役割を果たすと考えられる。保育者は、子どもが自分のペースで絵本に親しめるよう、落ち着いて見られる場所や時間を保障し、繰り返しの要求にも丁寧に応じることが

求められる。

言葉の発達において絵本は、音やリズムの面白さを味わいながら新たな言葉に出会う場となる。さらに絵本は、歌や身振り、ごっこ遊びへとつながり、イメージを広げる源となる。保育者は、子どもが自発的に再現したり重ね合わせたりする姿を見守り、共感しながら関わることで、感性や表現する力の育ちが支えられると考えられる。

また、3歳以上児にとって絵本は、文字や言葉、想像の世界に出会い、友達や保育者と経験や思いを共有しながら、自分の世界を広げていく役割を果たすと考えられる。絵本に親しむ中で、子どもは文字が気持ちや考えを伝える道具であることに気づき、日常生活の中で言葉や文字への関心を深めていく。また、絵本や物語は、言葉の楽しさや美しさを味わいながら、自分の思いや考えを表現し、他者の話を聞き合う力を育てる。さらに、絵本は、現実の生活と想像の世界を行ったり来たりしながら、感性や表現力に影響を与える。

保育者は、絵本の世界に十分に浸れる時間と空間を保障し、興味や関心に応じた絵本を選ぶとともに、一人でじっくり読む経験と、皆で共有する経験の両方を大切にすることで、想像力や創造性の育ちを支えていく援助を考える必要がある。

このように、絵本は発達段階ごとに少しずつ役割が変化していくものの、絵本そのものだけではなく、保育者との相互的な関係を基に、社会性、言葉、感性、表現の育ちを支える存在であると考えられる。子どもの絵本を考えるとき、選書だけでなく、保育者のあり方も考えることが重要であるといえる。

## 研究2：保育者を対象とした絵本の研修会のあり方の検討

目的：保育者対象の絵本の研修会のあり方を先行研究から概観する。

方法：わが国の論文検索サイトであるCiniiにおいて“絵本 研修 保育者”“絵本 選書”をキーワードに検索し、抽出された論文のうち、入手可能な研究を選出し、概要をまとめた。

結果と考察：

“絵本 研修 保育者”をキーワードとして検索した結果、23件の論文が抽出された。そのうち、入手可能で、保育者養成校の授業ではないもの、別の研修のために絵本を用いたものを除き、“現役保育者を対象とした絵本そのものの研修”についての研究は3つであった。これらの研究から、研修内容とその評価をまとめて表1に示した。

無藤ら（2004）の研修の特徴は、子どもたちがどう絵本に関わっているのか、本の部屋の意味、子ども達が選ぶ絵本のおもしろさの事例を紹介、そして、その事例の意味づけを助言者が行っており、参加者は具体的に学ぶことができたと考えられる。

梶谷（2015）の研修は、単なる講義ではなく、保育者が子どものように絵本の読み聞かせ体験をし、絵本について比較し語り合うことで、子どもの視点からの絵本の選び方が理解できるようになっている。「絵本は保育のすき間を埋める道具ではなく、教育的に位置づけられるべき教材である」を共有している。グループ学習を行うが、グループでの統一見解は不要、とにかく自分が子どもならどう感じるかという点を強調して絵本を評価することを徹底した。その結果、年齢や絵本の長さばかりにとらわれるのではなく、まず自分がしっかりと読んで、どう感じるかを大切にして選書することが大切である等、参加者が多くのことに気づいている。

仲本（2015）は、絵本の研修について多くの課題があることから保育者のための絵本の読みあいの研修プログラムを開発した。保育現場では、絵本は多く用いられているものの、保育者が一方的に読む「読み聞かせ」中心の実践が多く、子どもと保育者の相互作用としての絵本活動（＝読みあい）は、ほとんど検討されていなかった。また、今までの保育者研修は、理論中心で実践につながりにくいことなどを考慮して、実践例を元にしたグループワークを取り入れる等実践につながる結びつく内容とした。研修プログラムは実施後、参加者の評価から参加者にとってよりよい内容に改善して再度実施を行った。単なる知識習得だけでなく現場での応用力向上につながった等高く評価されている。

矢野（2017）は、講義が120分であり、その他はブックトーク、ワールドブックカフェ、そしてビデオを観ながらのグループ学習を行っている。保育現場の様子がビデオでわかり、参加者からも対話したことにより、多様な視点を受け入れ、保育を多面的に捉えることができ多くの気づきがあったと評価されている。

表1 保育者を対象とした絵本の研修会の内容と評価

絵本の魅力（無藤ら、2004）	
目的	大学附属学校が行う公立・私立の教員の資質向上のための研修のひとつ。絵本の魅力を知る
時間	120分
内容	「本の部屋」の先生としての事例提供： 子どもがよく選ぶ絵本から考えるおもしろさの特徴
	「本の部屋」という環境の意味についての考察
	助言者からの助言：子どもの発達と絵本経験との関係、保育における絵本という世界を作ることの重要性
評価	実践報告を主軸においてそれらの共有化からスタートしたことが参加者の満足度をより高めることにつながったと考えられた。
「明日からすぐに生かせる絵本選びのコツ」（梶谷、2015）	
目的	幼稚園教諭の絵本選書力向上、絵本を見る目を養う
時間	8時間（教員免許状更新講習時に実施のため試験、昼食を含む）
内容	絵本の役割に関する講義（75分×3）：幼稚園教育要領に基づき、絵本が子どもの言語・情緒・想像力の育ちに果たす役割を解説。
	絵本の比較の実践演習： 絵本比較の実践演習：グループ学習（75分） 3～4名のグループで共通テーマの絵本3冊を読み聞かせ合いながら比較 ①「子どもに読んでほしい」と選んだ良質な絵本 ②現場でよく読まれるが内容的に問題のある絵本 ③どちらとも言えない絵本（議論を深めるため） 大人同士で読み聞かせ合い、「子どもの視点で絵本を聴く」体験を重視。 子どもにすすめたいかどうかの視点でワークシートに◎○△×を記入しながら、内容・絵・物語の質を比較検討。長さや反応の良さだけで選ぶ危険性を指摘。
	発達に応じた絵本の紹介
評価	絵本を選ぶ目が養われた。 子どもの視点で絵本を捉える力が育った。 現場での選書・読み聞かせの質を高めようとする意欲が生まれた。

絵本を読みあう活動のための保育者研修プログラム（仲本、2015）	
目的	参加者の実践事例を振り返りながら絵本や読み合う活動の知識・保育技術を学び合い保育者の保育の質の向上につなげること。
時間	180分
内容	講義：読み合う活動中の子どもの理解と保育者のねらい、絵本・読み合う活動の知識と保育技術、読み合う活動と日常の保育がつながる保育計画
	実践事例の紹介：ビデオによる読み合う活動の実践事例の紹介と説明 グループ学習
評価	実践例を題材にしたグループ学習や振り返りにより、単なる知識習得だけでなく現場での応用力向上につながった。 参加者が読みあう活動についてねらいや計画、環境設定をより丁寧に考える姿勢が見られた。ただし研修だけで完結せず、日常保育の計画や保護者との連携を含めた理解・実践の継続が必要。
備考	実践、評価、改善、再実践を行っている
「絵本環境を見直そう」絵本を媒介にした対話型の現職者研修（矢野、2017）	
目的	各園の絵本環境を多角的に見直すための研修
時間	120分
内容	ブックトーク（15分）：持参した好きな絵本を紹介し合い、絵本観を共有する。
	ワールドカフェ（10分）：他者の絵本にコメントを付け合い、多様な視点を得る。
	講義（20分）絵本環境を見直す意義や環境構成の考え方を学ぶ。
	ビデオカンファレンス（50分）・グループ学習：各園で撮影した保育場面の映像を基に、気づきの付箋出し、グループでの整理、他グループへのコメント、担任による語り、解決につながる視点の抽出、優先度・緊急度の整理をし、環境改善の方向性を探る。
	まとめ（10分）：各園の課題整理、他園の工夫紹介
	リフレクションシート記入（5分）：研修の気づきや絵本環境への考えを記述
評価	テキストマイニングによる研修後の参加者の感想分析から、対話型研修は様々なポジティブな意見が出され、研修として効果があったと考えられた。単に講義を聴くだけでなく、対話したことにより、多様な視点を受け入れ、保育を多面的に捉えることができ多くの気づきがあったと評価された。絵本に対する考え方、多様な環境構成の視点の可視化、保育者の気づき・意欲の向上が確認できた。

## まとめ

本研究は、本学独自の保育者対象の絵本の勉強会を検討するにあたり、「保育所保育指針」を基に保育における絵本の位置づけを確認し、その後先行研究を概観して、保育者を対象とした絵本の研修会のあり方を検討した。

「保育所保育指針」で示されている絵本についての記述から、絵本は発達段階ごとに少しずつ役割が変化していくものの、絵本そのものだけではなく、保育者との相互的な関係を基に、社会性、言葉、感性、表現の育ちを支える存在であることが確認された。子どもの絵本を考えると、選書だけでなく、保育者のあり方も考えることが重要であるといえる。

また、保育者を対象とした絵本の研修会のあり方について先行研究を概観した結果、参加者から評価の高かった内容としては、一方的な講義だけではないこと、保育の実践に結びつくような実践事例の紹介があること、グループ学習があることが含まれていることがわかった。

以上をふまえ、今後は現役の保育者のニーズを捉え、実践に役立つ絵本の研修会の内容を検討し、仲本（2015）に倣い、実践、評価、改善、再実践を繰り返すことが必要であると考えられる。

#### 参考文献

- こども家庭庁 (cfa.go.jp) : 保育所保育指針解説 (保育指針解説 (分割版) | <https://www.cfa.go.jp/policies/hoiku/shishin-h30-bunkatsu/>)
- 梶谷恵子、脇 明子、湯澤美紀、片平朋世「保育者を対象とした絵本選書の研修：共通テーマによる絵本三冊の比較」ノートルダム清心女子大学紀要. 人間生活学・児童学・食品栄養学編39(1)、133-141、2015
- 泰羅雅登「読み聞かせは心の脳に届く」2009 くもん出版
- ドロシーバトラー、百々佑利子（翻訳）「クシュラの奇跡：140冊の絵本との日々」2006 のら書店
- 無藤 隆、岩立京子、倉持清美、西坂小百合、森下葉子、青木聡子「保育者研修において附属幼稚園が果たす役割：幼児教育未来研究会を通して」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要1、1-11、2004
- 文部科学省委託調査研究事業「幼児教育に関する大規模縦断調査」令和5年度予備調査報告書（詳細版）  
[https://www.mext.go.jp/content/20250214-mxt\\_youji-000039822-2.pdf?utm\\_source=chatgpt.com](https://www.mext.go.jp/content/20250214-mxt_youji-000039822-2.pdf?utm_source=chatgpt.com)
- 矢野景子「保育所における絵本環境を捉える視点を育む現職者研修の在り方—対話型研修受講者のテキストマインニング分析から—」東京福祉大学・大学院紀要8(1)、73-81、2017



---

# 保育者養成校における 子育て支援事業に期待される役割と可能性 ～学生主体の子育て支援ワークショップの取り組みから～

藤川 志つ子・齋藤 めぐみ

The expected role and potential of childcare support programs at  
childcare training schools  
～From the Efforts of Student-Led Parenting Support Workshops～

Shitsuko FUJIKAWA / Megumi SAITO

キーワード：保育者養成、子育て支援、地域貢献、互恵的な学び

本研究は、保育者養成校における子育て支援のあり方を検討するため、地域の子育て親子が保育者養成校に期待する「子育て支援」と、ワークショップを体験した学生の互恵的な学びを明らかにすることを目的とした。大学内で子育て支援ワークショップを実施し、養育者と学生へのアンケート調査を行った。その結果、養育者からは、乳幼児向けの設備や遊びの提供、養育者向けの講座への期待が示された。学生は、親子の姿を間近で観察し、実習では得られない学びを得ていた。子育て支援ワークショップは、養育者にとっては学生の関わり方から学びを得る機会となり、学生にとっては未来の保育者としての学びにつながることを示唆された。今後、学生の学びを深めるための振り返りの方法を検討する必要がある。

## 1 問題と目的

本学ではこれまで、教員がそれぞれの専門性を活かし、教員が主となり学外に出向き地域での子育て支援関連の活動を行ってきた。本学を拠点とした「子育て支援」事業については、稲毛キャンパスに移転した昨年からは、地域支援事業として総合子ども学研究所が主体となり本格的に着手し、本年度で2年目の取り組みとなっている。

こども家庭庁（2024）の「令和5年度地域子育て支援拠点事業実施状況報告書」によると、全国の子育て支援拠点は8,016カ所となっている。大学・短期大学かどうかは示されていないが、学校法人が運営する子育て支援拠点は320カ所と報告されており、全体の4.0%に過ぎない。難波他（2022）によれば、大学施設の利用者は少数であるものの、子育ての中で孤独を感じている親が利用する傾向にあること、地域とのつながりが高いことに満足感を得ていることを報告している。

また、永谷（2019）は、保育者養成校で行う「子育て支援事業」のメリットとして、場所的にも安心感があり、学生との出会いの中で利用者もリフレッシュできる点をあげている。加えて、子どもや保育、子育て支援の分野の専門教員がいるということも示唆している。児嶋ら（2022）は、全国の大学が行う子育て支援の取り組みについて、大学や自治体のホームページ等の情報をもとに運営の形態や開催頻度・特徴などを整理し、実施の状況を報告している。それによれば、約5割が自治体やNPOとの連携や委託を受けて実施しており、多くの大学が授業と関連付けて実施していることが示された。齋藤（2023）が課題としていた「ボランティア」としての学生参加が難しいことを鑑みると、授業と関連付けて実施することを積極的に検討することは肝要である。また、授業の一環として実施することで、学生自身が理論と実践を結び付けることが容易になり、体験（その場で何かを実際に行ったり・見たり・感じたりする）を経験（ある行動や出来事を通じて得た知識や技能、あるいはそこから得られる学び）として練り上げられ、学生自身が将来の保育者としての質の向上に寄与すると考えられる。

齋藤（2023）が指摘しているように、保育者養成校が行う「子育て支援」は、利用する養育者のニーズを満たすものだけではなく、教育機関として学生の学びの場となることを視野に入れて「子育て支援事業」を検討する必要がある。宮里ら（2017）は、学生の参加がある養成校が行う、子育て支援事業に関する先行研究をレビューし、その傾向を探っている。その結果、参加する親子の利益と学生の学びの利益を両立させる、互恵的な学びの評価が希薄である点を指摘している。今後、養成校が行う「子育て支援」事業が、参加学生にとって継続的な学びの場として機能するために、この視点での積極的な検証が必要になると考えられる。

以上のことから、本研究は、子育て支援ワークショップに参加した養育者と学生からのアンケート回答結果から、地域の子育て親子が保育者養成校に期待する「子育て支援」を探り、保育者養成校が展開する子育て支援のあり方を検討することを目的とする。更に、子育て支援ワークショップを体験した学生の互恵的な学びについて検討することを目的とする。

尚、本論稿での「互恵的な学び<sup>(注1)</sup>」とはお互いに特別な便宜や利益を与え合うことと定義する。本研究は、敬愛短期大学研究倫理規定に基づき「人を対象とする研究に関する計画書」の提出及び承認を受けて実施している（倫理番号：敬愛短期大学大学運営第54号）。

## 2 方法

### 1) 実施の概要

総合子ども学研究所所員の協力で、ブラッシュアップゼミ（2年次後期開講必修科目）を受講している学生が主体となり、表1に示す「子育て支援ワークショップ・全9回」を企画・実施した。尚、子育て家庭が子どものペースで参加できるように予約なし・出入り自由とした。

実施概要は以下の通りである。

実施期間：2025年10月22日（水）より2025年12月17日（水）

時間：水曜日2限、ブラッシュアップゼミの授業時間内で実施

但し、子育て支援ワークショップ開催時間は10時50分から12時まで

場所：敬愛大学・敬愛短期大学1号館6階 保育実習室

表1 子育て支援ワークショップ、全9回担当教員と実施内容

回数	日にち	担当ゼミ・内容
第1回	10月22日(水)	大野ゼミ 人形劇あそび
第2回	10月29日(水)	神永ゼミ パラシュートレインボーで遊ぼう
第3回	11月5日(水)	久保木ゼミ 絵本読み聞かせ・クレヨン遊び
第4回	11月12日(水)	池田ゼミ 空き箱で遊ぼう
第5回	11月19日(水)	池田ゼミ 感触遊びを楽しもう
第6回	11月26日(水)	齋藤ゼミ お母さんのための絵本講座・ブックトーク・絵本制作
第7回	12月3日(水)	吉村ゼミ 保護者の方に読んでいただきたいおすすめ絵本&手作りおもちゃの紹介
第8回	12月10日(水)	藤川ゼミ エプロンシアター・ふれあい親子あそび・風船で遊ぼう・手作りおもちゃを作ってみよう
第9回	12月17日(水)	酒井ゼミ パネルシアター・親子遊び

\*活動の詳細については資料1参照

各回の子育て支援ワークショップ終了後に、Googleフォームにて参加した養育者と学生にアンケート調査を実施した。調査結果については、学生に対しては研究論文作成に活用され、協力できない場合においても学業等に不利益を被ることがないこと、匿名での実施及び統計的に処理がなされるため個人が特定されないことを伝え同意を得ている。参加した養育者に対しても同様の内容を口頭及びGoogleフォーム上に記載し同意を得ている。

\*アンケートの詳細については資料2参照

## 2) 分析の手順

得られた自由回答のアンケート結果を、Excel一覧に集約し、白川(2025)を参考に集約したデータを、AIアフターコーディング<sup>(注2)</sup>を採用し整理した。

自由回答の設問の中から本研究の目的に沿って、養育者に対しては、子育て支援ワークショップに参加して「楽しかった・良かった点」と「会場にあると良いと思った整備や玩具」の2項目を、学生に対しては「子育て支援ワークショップを実践して学んだこと」の1項目を分析対象とし、コーディング(コード化)して同類項として記述内容をまとめた。

分析手順は次に示す通りである。

【自由回答結果をExcel表に集約→研究目的に沿ってラベルを設定→AIアフターコーディングツールにてラベルに沿ったカテゴリーに記述内容を分類】

以下に、それぞれの設問項目のラベルを示す。

- 設問項目「楽しかった・良かった」: i 学生の対応 ii ワークショップの内容 iii 子育ての仲間作りの3つのラベルでコード化した。
- 設問項目「会場にあると良いと思った整備や玩具」: i 設備に関する要望 ii 玩具に関する要望 iii 衛生面に関する要望の3つのラベルでコード化した。
- 設問項目「子育て支援ワークショップを実践して学んだこと」: i 親子の姿からの学び ii 実習との違い iii 保育者としての学びと課題の3つのラベルでコード化した。

### 3 結果

全9回を通しての延べ参加人数は、以下に示す通りである。

養育者：158名、子ども：164名、見学者：4名 学生：136名

#### 1) アンケート結果（養育者）：回答率35%（56／158）

全9回の延べ参加人数は、養育者158名、子ども164名、見学者4名となっており、回答率は35%（56名）であった。参加した子どもの年齢を図1、同行した養育者の年代を図2、子育て支援ワークショップの感想（選択式）を図3に示した。

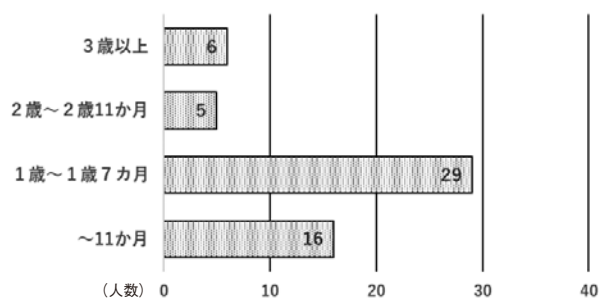


図1 参加した子どもの年齢

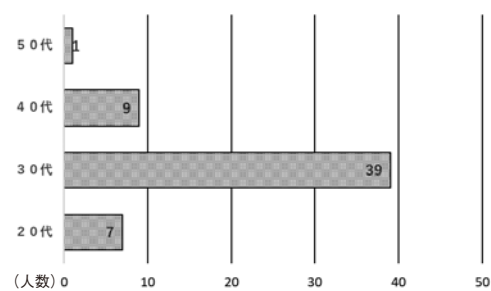


図2 同行した養育者の年代

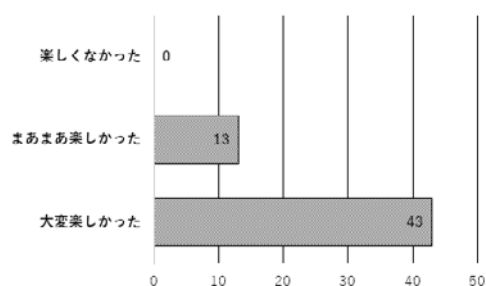


図3 子育て支援ワークショップの感想

図1が示す通りに、今回参加した子どもの多くは2歳未満児となっており、乳児を子育て中の親子のニーズが、この地域では高いことが示された。また、同行する養育者の年代は30代が最も多い結果となっていた（図2）。

今回の子育て支援ワークショップに参加した選択式の感想では、大変楽しかったと回答した養育者が約8割という結果となっていた（図3）。

次に、「楽しかった・良かった点」と「会場にあると良いと思った整備や玩具」の2つの記述内容をAIアフターコーディングツールにて分析した結果（記述内容抜粋）を、表2と表3に示す。尚、記述内容については個人が特性されない内容かどうかを確認し、原文のまま分析対象とした。

表2 楽しかった・良かった点

カテゴリー	記述内容（抜粋）
学生の 対応に関して	・学生方が積極的に関わってくれて子どもたちも楽しそうにしてたから良かったです
	・なかなか入室できずにいたところ皆さんのたくさんのお声がけで入室ができ、楽しい時間を過ごすことができました。あつという間に時間となり遊びに夢中だったタイミングでしたので泣きながらの強制終了かなと思ったのですが、一緒に片付けをすることで時間の区切りを作ってくださいました。お陰様で泣かれず終わりになり楽しく過ごすことができました
	・学生さん達が歓迎してくださり、娘もとても楽しそうでした
	・クレヨンで絵を描くよりも、クレヨンをどうぞと渡したり、新聞紙を破くのが楽しくなっている娘に合わせて遊びを展開したり、クレヨンで描いている所を見せたり、色を選ばせてくれたりしたところが素敵だな、私も真似して関わりたいなと思いました。活動に参加しなければと焦っていましたが、本人なりの楽しみ方があるんだなあと思いました
	・学生さんがあやしてくれてよかった。空き箱で楽しそうに遊べることを知れて良かった
	・学生さんも丁寧に一緒に遊んでくれて安心感があった
	・親と離れて家族以外と遊ぶ経験が今までなかったため、遠くから見守りつつ学生さんにお任せできて、親にとっても子にとっても良い経験ができました
	・学生さんがとても親切で、たくさん遊んでくださいました。自由に遊ばせていただき、感謝します
	・学生さんたちに子どもを見てもらってるうちに絵本の講義が聞けてよかった
	・学生が主体的に動いている
	・学生の方々のノリもよく、どこへ行っても最後まで楽しく過ごせました。『おおきなかぶ』ではマイペースに遊んでいて聞いていないように思っていたら、帰宅後、「うんとこしょ！どっこいしょ！まだまだかぶはぬけません！……あー！ぬけたー！」と繰り返し楽しそうにしていました
・学生さんの声かけも良かった。良くないことをしていてもダメだよ、などのマイナスな声かけもなく良かった	
ワークショップ 内容について	・手遊びや絵本は大好きなので、喜んで参加させていただきました。娘は初めてクレヨンを触ったり、椅子に座ってお絵描きをしたりと良い経験ができました
	・大きい紙に絵をかけたのは本人も楽しそうだった
	・たくさんの素材が用意してあってよかったです
	・空き箱で楽しそうに遊べることを知れて良かった
	・家にはないおもちゃや絵本、画材など使うことができた
	・たくさんの空き箱があって、息子が楽しそうに遊んでいた
	・家にはないクレヨンやシール、ブロックで遊べて子どもたちは楽しそうだった
	・初めて粘土に触れて興奮してました。他にも沢山のおもちゃがあって、家で同じことをしようとするのが大変なので助かりました
・カプラで遊ばせてみたかったので、今日置いてあって楽しめました	

ワークショップ 内容について	・絵本の紹介も多く大変参考になった。折り紙をちぎって貼る遊びは子どもも喜んでいた
	・知らない絵本について詳しく教えてくださったり、絵本の読み方についてコツを教えてもらった
	・何でも手に入る時代に、身近なもので手作りして一緒に遊ぶなんて良いなあと改めて思いました
	・ワークショップが特に楽しく、家ではなかなかできない塩をスプーンで移す等、とても真剣にやっていました
	・身近なものでおもちゃが作れたり、風船に乗るなどなかなか経験できないことができた
	・種類豊富な自由遊びもありつつ、皆んなで鑑賞するエプロンシアターもあって、いろいろな楽しみ方ができました
	・手作りおもちゃだったり、珍しいおもちゃだったり、家庭ではなかなかできない遊びやダイナミックな遊び方ができて良かったです
	・歌遊び、パネルシアターは、みんなでわいわい出来てとても楽しめました
子育て仲間作り	・同じ年頃の子達と触れ合えてよかったです！
	・自宅保育で限られた人との関わりの中いろんな人が遊んでくださりいい刺激になりました
	・同じくらいの子が沢山いた事
	・ママさんと交流できた事
	・学生さんとママ+お子さんと時間を共有できたこと

【学生の対応に関して】 カテゴリー化された記述内容を確認すると、「積極的に関わってくれた」「声かけがよかった」「主体的に動いていた」「とても親切だった」「丁寧に関わってくれた」「あやしてくれた」「安心感があった」「任せられた」等、子どもに対する学生の姿勢を見て、ポジティブな評価をしていたことが示された。また、「……遊びに夢中のタイミングでしたので泣きながらの……一緒に片づけをすることで……」「……マイペースで遊んでいて聞いていないように思っていたら、帰宅してから……」と、親の知らない子どもの新たな姿を発見する機会になった内容も確認された。更に「色を選ばせてくれたりしたところが素敵だな、私も真似して関わりたい……」「良くないことをしてもダメだよ、などマイナスな声かけもなく……」「活動に参加しなければと焦っていましたが、本人なりの楽しみ方があるんだなあと思いました。」という記述内容から、これまで、保育の学びを重ね必要な実習での学びを終えている2年生後期であるからこそ、見せることが出来る姿と考えられると思われる。その他、少数ではあるが「家族以外と遊ぶ経験……」という記述内容から、家族以外の大人と関わる機会の少ないことが推測される。

【ワークショップ内容について】 にカテゴリー化された記述内容を確認すると、「はじめてクレヨンにさわった」「椅子に座った」「大きな紙に絵をかけた」「はじめて粘土に触れた」「家ではなかなかできない……」「空き箱で遊べることを知った」「風船にのる体験……」「家にはないおもちゃ……」等、本校の子育て支援ワークショップに参加することで、養育者が家庭では用意できない遊びを体験できた喜びが確認される結果が得られた。更に「手遊びや歌が大好きなので、喜

んで参加させていただいた」「みんなでエプロンシアター……」「歌あそび、パネルシアターはみんなでワイワイ……」等から、子育て中の養育者にとって、集団で体験できる内容も求めていることが示された。加えて、「絵本の読み方のコツを教えていただいた」「絵本の紹介も多く……」との記述内容から、大人にとって有益となるワークショップの内容も検討していく必要があると考えられる。

【子育て仲間作り】にカテゴリー化された記述内容を確認すると、「同じ年頃の子たちと触れ合えてよかった」「ママさんと交流ができた」「同じくらいの子がたくさんいた」「……時間を共有できた」等、同年齢の子どもたちと交流する場を求めていることや、同世代の子どもの子育てをする仲間を求めていることが示される結果となっていた。

表3 会場にあると良いと思った設備や玩具

カテゴリー	記述内容（抜粋）
設備に関する要望	・ティッシュ、ゴミ箱
	・一箇所に絵本しかなかったので、点々とおもちゃや絵本があるといいかなと思いました
	・当日使わない絵本やブロックをまとめてゾーンにすると、クレヨンゾーンと混ざらなくていいかなと思います
	・十分に準備された会場だと思いました
	・始まるまでに少し遊べる積み木とかおもちゃがあるといいと思いました
	・授乳室と離乳食を食べられるスペース
	・こどものお絵かきスペースがあると1歳半以上は興味をもつと思いました
	・靴を脱いでイベントに参加できたので、子どもが自由に過ごせてとても良い環境でした
	・子ども関連の施設案内図
	・おむつ替えスペースや、休憩スペースがあるのか調べてなかった為ちょっと戸惑いました
	・絵本を楽しみにきたので、絵本を読むスペースがもっと広いと嬉しかったです
	・人数が多くなった時のためや遊びゾーンを分けるなどで2部屋用意しておく余裕持って遊べるかなと思った
	・子どもが転んでも大丈夫なようにマットが敷いてあると安心
おもちゃに関する要望	・仕掛け絵本、ボールや音の鳴るおもちゃ、積み木などが好きなので自由に触れると嬉しいです
	・遊び道具は十分準備いただけていました
	・木のおもちゃ
	・絵本も積み木もあったので良かったです
	・廃材を使った玩具は自宅でも作れたりするので参考になります。また、学生が作ったものを実際に子ども達が遊んでいたのが良かった
	・おもちゃがもう少しあるといいなと思った
	・お絵かきやつみき、手作りおもちゃ
	・手作りの玩具は温かみがあって良かった
	・握れるおもちゃ（6ヶ月の為）
・足裏刺激のおもちゃ	
・ボールプールのような空間、手押し車、大型絵本	

衛生面に関する 要望	・ティッシュ、ゴミ箱
	・綺麗な場所ですごく心地よかった
	・感染症が流行る時期なので、ティッシュや除菌用（ノンアルコール）ウェットティッシュがあると良いと思います
	・部屋が暖かめで、少し動いたら汗ばんだ
	・ミルク缶やヨーグルト、牛乳等の空き容器等はどんどん出るので提供してもらえるのではないかなあと、集まりすぎてしまったり、アレルギーや衛生的な面も気になることもあるかもしれませんが……

【設備に関する要望】にカテゴリー化された記述内容を確認すると、「ティッシュ・ゴミ箱」「授乳室」「離乳食のスペース」「おもむ替のスペース」「休憩スペース」等、子育て支援ワークショップの基本的な設備に関する要望と「点々とおもちゃや絵本があるといいかな」「……絵本やブロックをまとめてゾーンにする……クレヨンゾーンと混ざらないように……」「お絵描きスペース」「絵本を読むスペース」等、遊びのペースに合わせたコーナー作りの提案が示された。更に「転んでも大丈夫のようにマットが敷いてあると安心」等、安全面への提案も確認された。

【おもちゃに関する要望】にカテゴリー化された記述内容を確認すると、「仕掛け絵本」「ボール・音のなるおもちゃ」「握れるおもちゃ」「手押し車」「大型絵本」「木のおもちゃ」等、発達に合わせたおもちゃの準備のほか、「十分準備していただいていた」「手作り玩具は温かみがあってよかった」「自宅でも作れるので参考になる」等、今回準備したおもちゃで満足できたとの声も得られた。

【衛生面に関する要望】にカテゴリー化された記述内容を確認すると、開催時期との関係もあるが、感染症への配慮や室内の温度や換気に関する意見が得られた。

## 2) アンケート結果（学生）：回答率52%（71/136）

全9回の延べ参加学生人数は136名となっており、回答率は52%（71名）であった。

子育て支援ワークショップの感想（選択式）を図4、特に学びになったこと（選択式）を図5に示した。

図4が示す通りに、企画・実践した学生のほとんどが、子育て支援ワークショップを終えた後に「大変楽しかった・良かった、まあまあ楽しかった・まあまあ良かった」と回答しており、ほとんどの学生が授業の一環として企画・実践することにポジティブな印象を持っている結果が得られた。また、子育て支援ワークショップで特に学びになったこと（選択式）では、ほとんどの学生が「親子の様子を近くでみられたこと」を選択し、次いで「親へのかかわり方」「子どもへのかかわり方」「遊びの伝え方の難しさ」という結果となっていた（図5）。

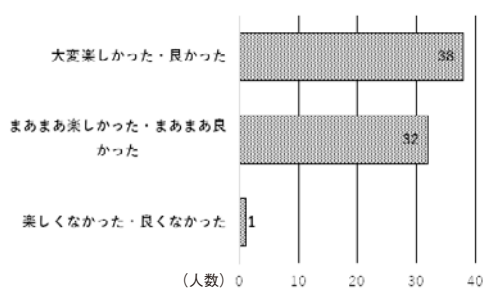


図4 子育て支援ワークショップの感想

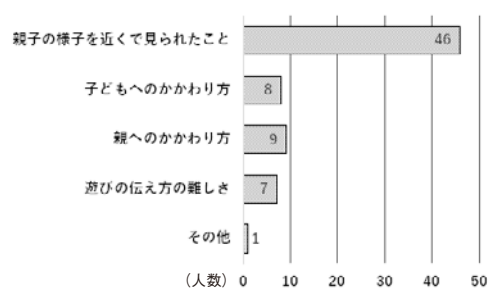


図5 特に学びになったこと

次に、「子育て支援ワークショップを実践して学んだこと」の記述内容をAIアフターコーディングツールにて分析した結果（記述内容抜粋）を表4に示す。尚、記述内容については個人が特定されない内容かどうかを確認し、原文のまま分析対象とした。

表4 子育て支援ワークショップを実践して学んだこと

カテゴリー	記述内容（抜粋）
親子の姿からの学び	・お母さんはやってほしいことでも、子どもの反応から無理させない・しない様子が見られた
	・自分の子が人見知りをせずに色々な人と関われるようになって欲しいという思いがあることを知った
	・今回の実践から、子どもたちより楽しめるようどう関わるかを学ぶと共に、保護者が子供たちを見る目線の優しさも感じる事が出来ました
	・ふれあい遊びを親子で行ってもらったので家庭それぞれの関係性が見ることができて学びになった
	・保護者が子どもに対してどのように接しているのかを近くで見れたから
	・ずっと親の近くにいる子どももいれば、一人で歩き回ったり走ったりしている子どももいて、色々な姿が見られた
	・保護者はどのように子どもと関わっているのか実際に見ることが出来、今回は乳児が多かった為、誤食など気をつけていたことに気付かされた
	・普段見られない親子の姿を見て、どう接しているのか、何が好きなのかなどいちばんわかっているのもその姿を見て一緒に関わることができた
	・お母さんと子どもの会話、関わりを直接見ることが出来た。こんな会話してるんだなとか間近でみる事ができて、自分の知識が増えた
	・私たちのような知らない人がいる時には、保護者から離れない様子が多く、子どもにとっての安心出来る存在が保護者であることを再確認できた
・自分が思っていたよりも保護者は子どもから目を離すことができないということを知りました	
実習との違い	・実際に親子の姿を見て、子どもや保護者への寄り添い方などを知ることが出来ました
	・実習などでは親子の関わりを見ることはなかったのでもいい経験になった
	・自分と子どもとの関わり方は実習などで関わっているけれども、子どもと保護者の関わりは今回の子育てワークショップなどでしか見えない
	・保護者への関わり方が難しかった
	・親子で子どもたちが関わっている姿を実際に見るのは幼稚園実習での親子参加のみだったので今回の子育てワークショップを通して、親子で関わる姿をより多く感じる事ができた
	・保護者と関わろうと意識するのではなく、子どもと関わりながら自然と話すことが体験できた
・親にどう伝えればいいのか何を話せばいいのかと色々考えることが多かった	

保育者としての 学びと課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>一人ひとり性格も違うので、その子が楽しめるような遊びを引き出すことを学んだ。これ！と決めるのではなく、その遊びからどんどん広げてその子どもにあった楽しみ方があると思ったから</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>何で遊ぶか迷っている子どもがいて、来るまで待つのではなく、誘ってみたりすると子どもも参加しやすく楽しめると思った。そしてその事が自分の行動として1番印象的だったから</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>あの場所に安心感を感じながら見守られたり、関わっておられたり、次も来たい場所になるといいなあ〜。と参加者をみて感じた</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>親子でいらっしゃったため、子どもはなかなか親御さんから離れなかったりしていたので、どう関わったら安心してもらえるかを試行錯誤して、保護者の方とお話が出来た</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>信頼関係が築かれているからこそ「みてて」と言葉で言ったり、視線を送っていたりするのだと間近で見ることによって学びが深まりました。子供を客観的に見られる時間が大切であることも思いました</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>0、1歳の子どもは他のお友だちのものを取ってしまったりテーブルの下に入ってしまったりなど危険なことがたくさんあるのでとても大変だということを知れました</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>関わった親子は、座ると靴履けるんですよ！たまに間違えちゃうけど上着着れるんですよ！と、楽しそうに話してくださいました。それは園での先生方の関わりの賜物かもしれませんが、そこを見極める力が保育者には必要だと感じました。なにより、保護者の方が楽しく嬉しそうに子どもの話をしている姿が見れたことがとても嬉しかったです</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの話から親から話を引き出せるなと感じた</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>質問された時に根拠をしっかりと知っていれば自信を持って答えられるのですが、自信がなく曖昧になってしまったことがあったので学びが足りないなと思いました</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>まだお話ができなくて表情からわかるような年齢の子達だったのでどの子どもどのように関わっていくか難しかった</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの様子からおもちゃの遊び方を変えたり、安全に遊べるような工夫をしたりすることが難しかった</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもと遊びながら保護者の方に伝えること</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>どのように遊びに誘うか難しかった。年齢によって見守るときと声掛けのタイミングが難しく泣いてしまう時があった</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>気持ちに共感する言葉をかけるだけでなく、必要に応じて保護者が心おき無くお話できるような環境を構成することが大切だと学びました</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>今回は私が緊張してしまっていたこともあり、会話がすぐ終わってしまい、相手も話してみたいという雰囲気にはなれなかったと思いました。でも今回の子育て支援を通して、自分の課題も見えてきて良い経験になったと思います</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分が遊んで見せることで、子どもが真似をして一緒に遊び始めたこと</li> </ul>

【親子の姿からの学び】にカテゴリー化された記述内容を確認すると、「自分の子が人見知りせず色々な人と関わられるようになって欲しいという思い」「保護者が子どもたちを見る目線の優しさ……」「家庭それぞれの関係性がある……」「保護者が子どもに対してどのように接しているのかが……」「さまざまな姿」「誤飲などに気をつけている」「何が好きなのか一番わかっている……」「こんな会話をしている……」「知らない人がいる時には親から離れない……」「保護者は子どもから目を離さない……」など、理論での学びと実際の姿を結び付けて考える姿や、養育者の思いに触れて、保育者として新たな学びを獲得していることが示された。

【実習との違い】にカテゴリー化された記述内容を確認すると、「子どもや保護者への寄り添い方等を知ることが出来た」「実習などでは親子のかかわりを見るが出来なかったので良かった」「親子で関わる姿をより多く感じる事が出来た」「子どもと関わりながら自然と話すことが体験できた」等、実際に保護者と触れ合う機会を持ったことで、今後の保護者支援への見通しが実感出来たと推測される。一方、「保護者へのかかわり方が難しかった」「親にどう伝えればいいのか、何を話せばいいのかと色々考えることが多かった」等の記述もあり、実践を通して自身の課題を見つけられた学生も確認された。

【保育者としての学びと課題】にカテゴリー化された記述内容を確認すると、「一人ひとり性格も違うので、その子が楽しめるような遊びを引き出すことを学んだ」「何で遊ぶかを迷っている子どもがいて、来るまで待つのではなく、誘ってみたりすると子どもも参加しやすい……」「どう関わったら安心してもらえるかを試行錯誤……」「0.1歳の子は……危険なことがたくさんあるのでとても大変」「子どもの話から親から話を引き出せると感じた」「自分が遊んで見せることで子どもが真似をして一緒に遊び始めた」等、実践から学んだかかわりの成果を得ていた。更に、「次も来たい場所になるといいなあ……」「子どもを客観的に見られる時間が大切である」「保護者の方が楽しく嬉しそうに子どもの話をしている姿が見られたことがとても嬉しかった」等に代表される、支援者としての視点での思いが確認できた。一方、「根拠をしっかりと知っていれば自信をもって答えられるのに……」「年齢によって見守るときと声かけのタイミングが難しい」「会話がすぐに終わってしまった……自分の課題が見えてきた」「保護者が心おきなく会話ができるような環境構成の必要性」など、自身の課題が明確となった学生も散見された。

#### 4 考察

本研究は、地域の子育て親子が保育者養成校に期待する「子育て支援」を探り、保育者養成校が展開する子育て支援のあり方を検討し、子育て支援ワークショップを体験した学生の互恵的な学びについて検討することを目的とした。

今年度は、大学の構内にある保育実習室を活用し、2年次必修科目であるブラッシュアップゼミの授業内で、全9回の子育て支援ワークショップを実施した。

延べ参加人数は、養育者158名、子ども164名、見学者4名となっており、多くの地域の子育て親子が足を運んでくれたという結果であった。参加後のアンケート回答率は35% (56/158) と低い水準であったが、回答者の多くが2歳未満児の子育て中の養育者であることを考えると十分な回答率ではないかと思われる。

まず、乳児が使用する基本的な設備では、安全面や衛生面での指摘や、乳児に合わせた遊びの

コーナーの設置、良質の玩具や絵本の準備等を期待することが示される結果となっていた。子育て支援ワークショップのニーズの中核となる年齢は乳児であることを前提に、設備面の検討をすることが急務ではないだろうか。

ワークショップの内容については、養育者が家庭では用意できない遊びを体験することへの期待が多数寄せられていた。その他、多くが集団保育未経験の乳児ということもあり「みんなで一緒」の活動を期待する声も確認された。更に、養育者に向けた講座等、大人にとって有益となるワークショップの充実も求められている。山本ら（2024）の調査結果からも子育て支援ひろばは、子どものみならずおとなへの支援が重視されていることを指摘しており、今後検討が必要な点と考えられる。その他、同年齢の子どもたちと交流する場や同世代の子どもの子育てをする仲間がいる場についても求めていることも示唆された。

以上の事は、保育所保育指針解説 第4章子育て支援 1. 保育所における子育て支援に関する基本的事項 (1) 保育所の特性を活かした子育て支援 イ保護者に対する基本的態度の内容に盛り込まれている内容であった。全ての内容を反映することは難しいが、子育て支援にかかわる保育者を養成する機関として、この結果を念頭におき「敬愛短期大学」の独自性を持った子育て支援ワークショップのあり方について練り上げていく必要がある。

参加後に「大変楽しかった」と回答した養育者が約8割となっており「楽しくなかった」と回答した養育者はいなかった。勿論、無記名でのアンケートとはいえ、ネガティブな回答を控えたという心理的な要因もあると思うが、学生が企画・実践した今回の子育て支援ワークショップで、参加者から良い評価が得られたことは保育者としての励みになると考えられる。また、自由記述の【学生の対応に関して】カテゴリー化された記述内容についても、ポジティブな評価が多く、授業評価とは関係のない第三者からの承認は、保育者としての自信につながると考えられる。更に、これまでの学びで培った子どもへのかかわり方を養育者の前で示したことが、養育者の学びにつながっていたことも大きな収穫となるのではないだろうか。

保育所保育指針解説 第4章 子育て支援の【保育所における保護者に対する子育て支援の原則】の冒頭に記載されている、児童福祉法第18条の4は、「この法律で、保育士とは、第18条の18第1項の登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもつて、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう」と定めている。の、保護者に対する保育に関する指導は、子育てに関する相談、助言、行動見本の提示である。今回の子育て支援ワークショップで見せた学生の姿は、行動見本の提示にあたりと考えられる。学生の回答から、実習ではほとんど体験できなかった親子の姿から、保育者として新たな学びや課題を獲得していることが確認され、子育て支援ワークショップを企画・実践することが、未来の保育者として確かな学びにつながっていることが明らかになっていた。

しかしながら、子育て支援ワークショップ実施後の学生への学びの振り返りについては各ゼミに任せており、学生がどのような学びを得ているのか、またそれを今後どう活かそうとしているのか等、学生の学びを構築する手だてを講じていない。学生のアンケート回答結果からは、確かな学びになったことは確認できるが、養育者の回答結果を学生が確認する機会を設けるなどの全体的な機会は設けていない。宮里（2017）が指摘しているように、適切な振り返りの機会を設けることで、学生が自分の行為に自信が持てることになり、保育者としての成長につながるのではないだろうか。

以上、検討事項は山積ではあるが、養育者にとっては学生の存在が子育てにおいてポジティブな影響を与えていたことが明らかになり一方、学生にとっても、親子が共に過ごす場に関わることで、通常の実習では得がたい学びを経験できたことが示された。これは、保育者養成を担う大学が行う子育て支援の重要な役割の一つであると考えられる。すなわち、保育を学ぶ学生の子どもに対する関わり方を養育者が目の当たりにすることで、養育者自身が子どもへの接し方や関わり方を学ぶ機会となっていたことが示唆された。この意味で、今年度の子育て支援ワークショップについて、大学が行った子育て支援ワークショップの役割のひとつを果たしたといえる。

今回分析対象としなかったが、その他の自由回答で、養育者から保育を学んでいる学生としての服装や身だしなみについて、問いを立てられる意見もあった。この意見をふまえ、学生自身が保育を学ぶ学生としてどうあるべきかを考える機会にしたい。

## 5 今後の課題

子育て支援の実践に関わる体験は、学生にとって子育ての実際に触れ、親の思いや子どもの実態理解にもつながる機会になっており、卒業年次にこうした体験を通して学ぶことは、後の保育者としての子育て支援の力につながっていくことが期待できると考える。

その為には、子育て支援ワークショップの企画・実践のみに留まらず、この体験を互恵的な学びに変えるための、振り返りの方法について構築していくことが急務と考えられる。

また、子育て支援事業を保育者養成校で行う上では、参加する養育者の思いに即した内容と保育者養成校としての支援技術あるいは保育技術を明らかにし、学生に教授していく必要があると考える。子育て支援ワークショップが単なる保育イベントではなく、保育所保育指針に則って「子育て」を「支援」することを深く検討していくことが望まれる。

また、実践体験が後に保育者としてどのような学習効果をもたらすかについては、今後実証的研究が必要であるが、双方の互恵的な学びの視点で子育て支援を振り返り、成果と課題の検証を繰り返すことで継続的な学びの場となり得ると考えられる。

〔謝辞〕本研究に協力してくださいました、本学教員の<sup>1</sup>大野雄子教授、<sup>2</sup>神永直美教授、<sup>3</sup>久保木健夫准教授、<sup>4</sup>池田純子准教授、<sup>5</sup>齋藤めぐみ教授、<sup>6</sup>吉村真理子教授、<sup>7</sup>酒井基宏講師並びに、子育て支援ワークショップに参加して下さった皆様、敬愛短期大学の学生に記して感謝申し上げます。

### 注

(注1) デジタル大辞泉

<https://kotobank.jp/dictionary/daijisen/1138/> 2026/01/03閲覧

(注2) AIアフターコーディングとは自由回答の内容を統一されたコード（カテゴリー）に割り当て、OA（Open Answer）、FA（Free Answer）とも呼ばれる質的なデータを数値化する手法の一つであり、集めた自由回答をカテゴリー化して量的に可視化し有効に活用できる手法である。

資料1)

## 【子育て支援ワークショップ実施状況】

### 第1回大野ゼミ：人形劇あそび

- 参加者：学生16名、養育者13名、子ども14名（0歳児～3歳児）

#### 【実施の概要】

- 進め方：学生による「えほんのもりにおいでよ～♪けいたん♪の冒険」の人形劇を実施。実施後は、人形（学生）を介して学生と子どもがふれあい、お話をして遊んだ。次に学生があらかじめ準備しておいた紙コップ製の動物親子の「パクパク人形」を歌いながら紹介し、養育者や学生が子どもと触れ合いながら作り、子どもとお話遊びをした。
- 学生と子どもの様子：初めて出会う子どもであることを踏まえ、人形を仲介に話しかけ、三者関係を築き丁寧に距離を縮めていく姿が見られた。
- 養育者と学生の様子：学生から積極的に話しかけ、養育者と安定的な対話を持つことで子どもを安心させていた。「保育園に行く前に自分から離れる練習をしたかった」、「敬愛フェスティバルで楽しかったから来た」という養育者の声があった。

### 第2回神永ゼミ：パラシュートレインボーで遊ぼう

- 参加者：学生16名、養育者10名（内父親1人）、子ども10名（0歳児～3歳児）

#### 【実施の概要】

- 進め方：前半は好きな遊びのコーナー（ハロウィーンバッグ作り、絵本、スカーフ遊び、絵を描く、パラシュート遊び）を準備。それぞれ学生が担当し、子どもたちを誘って遊んだ。後半は、学生のリードでみんな一緒に（パラシュートレインボー、触れ合い遊び、歌、手遊び、絵本）活動して楽しんだ。特にパラシュートレインボーは、音楽に合わせて様々な動きが楽しめるようにした。
- 養育者と学生の様子：学生たちは、笑顔で親子を迎え、楽しく一緒に遊ぶ様子が見られた。積極的に親子を遊びに誘うことができた。「パラシュートレインボーでたっぷり遊べて楽しかった」「学生さんたちが笑顔で接してくれたので親しみがわいた」という声があった。

### 第3回久保木ゼミ：絵本の読み聞かせ・クレヨン遊び

- 参加者：学生15名、養育者11名、子ども13名（0歳児～3歳児）

#### 【実施の概要】

- 進め方：手遊び、大型絵本の読み聞かせ、クレヨン遊び（途中で絵本の読み聞かせを状況に応じて実施）、手遊び（ピアノ伴奏付き）を実施。※ 画用紙に描いた絵はクリアフォルダに入れて、子ども達がお土産として持ち帰った。
- 養育者と学生の様子：学生は優しく子ども達と対応することができていた。クレヨン遊びの最中も状況に応じて子どもの動きに対応したり、絵本の読み聞かせを行ったりしていた。学生は「楽しかった」「保護者がいるので緊張した」等、実感の込もった振り返りを口にしていた。「優しい学生さん達が積極的に関わってくれて子ども達も嬉しそうだった」「同

じ年頃の子ども達とも関わられて良かった」「描画に限らず、子どもにあわせて遊んでくれた」「子どもがクレヨンを舐めそうな時もたくさんの手が差し伸べられて安心した」「おもちゃもあると良いと思った」等の声があった。

#### 第4・5回池田ゼミ：空き箱で遊ぼう・感触遊びを楽しもう

- 参加者：第4回：学生16名、養育者21名、子ども20名（0歳児～3歳児）  
第5回：学生16名、養育者17名、子ども16名（0歳児～3歳児）

##### 【実施の概要】

- 進め方：机4つに折り紙、シール、サインペン、クレパス、ベビーコロール、白画用紙を準備。緑色のカーペットにリトミックスカーフ、指人形を準備。組み立て式のおうちとトンネル、大型ブロック、カプラを準備し自由に親子で遊んでもらった。
- 11/12：空き箱・洗濯ばさみ、11/19：片栗粉粘土・ふわふわ粘土を用意し、集まった親子から自由に遊んでもらい、最後に学生が絵本の読み聞かせを行い、帰りには折り紙のお土産を渡した。
- 養育者と学生の様子：あっという間に20人の子どもたちが集まってきたのでそれぞれが子どもたちのそばで遊び始めた。遊ぶ場所が何か所かあるので臨機応変に交代して遊んでいた。養育者の方々も「どんなゼミですか?」「4月からは保育園の先生なんですね。」等、会話を楽しんでいるように見えた。学生は子どもたちの様子を見ながらゆっくりと遊びを差し出したり、一緒に遊ぶ等、自分たちも楽しんでいる姿が見られた。子どもに合わせて「待つ姿勢」が見られたことが大変によかった。

#### 第6回齋藤ゼミ：お母さんのための絵本講座・ブックトーク・絵本制作

- 参加者：学生13名、養育者12名、子ども10名（0歳児～3歳児）

##### 【実施の概要】

- 進め方：①と②を並行して実施

##### ①：子ども：学生と自由に遊ぶ：

ひざで絵本の読み聞かせ、製作（葉っぱのこすり絵、ちぎり絵、マラカス）、ボールプール等の遊具での遊び

##### ②：養育者：絵本講座、ミニ絵本作り（資料配布）

資料に基づき、絵本の選書と読み方についての話、A3用紙1枚で作る「あなたのすてきなところはね」の絵本作り

- 養育者と子ども：ふれあい手遊びと絵本の読み聞かせ、マラカスでおもちゃのチャチャチャ、やまのおんがく家、バスにのっていこう、みつやサイダー、あんぱんまん、クリスマス、秋、どんぐりをテーマにした絵本
- 養育者と学生の様子：それぞれのコーナーに分かれて子どもたちと積極的に関わっていた。ほぼ全員、親子が離れても大丈夫であった。今回は、ゼミ担当教員が養育者の講座をもったので学生は、あまり養育者と接していないが、学生がリードした親子で行うふれあい手遊びを楽しんで行っていた。

### 第7回吉村ゼミ：保護者の方に読んでいただきたいおススメ絵本＆手作りおもちゃの紹介

- 参加者：学生15名、養育者19名（内父親1人）、子ども18名（0歳児～3歳児）、見学者1名

#### 【実施の概要】

- 進め方：学生がBGMを流し、グループ毎にトイレットペーパーの芯等を利用した手作りおもちゃで遊ぶコーナーや塗り絵・お絵描きコーナーを準備し、笑顔で子どもたちを積極的に誘って遊んでいた。お子さんにはプレゼントとしてクマの手作りペンダントを選んでいただき、保護者には「保護者の方への絵本紹介リスト」をお渡しした。
- 養育者と学生の様子：学生たちは、タイミングを見計らって、各自が選んだ保護者に読んでいただきたいお薦め絵本を紹介した。その際に、本学附属こども園や千葉市立保育所で紹介した絵本のPOPと保護者からの読後感想コメントも読んでいただいた。

### 第8回藤川ゼミ：風船で遊ぼう・手作りおもちゃを作ってみよう・エプロンシアター

- 参加者：学生14名、養育者32名（内父親3人）、子ども34名（0歳児～3歳児）、見学者2名

#### 【実施の概要】

- 進め方：学生によるコーナー遊びを設け、親子で好きな場所でそれぞれのペースで過ごしてもらった。コーナーは、セロハンを使った制作、ソルトマラカス、手作りおもちゃコーナー、木のおもちゃコーナー、紙コップコーナー、変身コーナー、風船遊び・トランポリンコーナーを設置した。途中で学生による手遊びとエプロンシアター（大きなかぶ）を行った。
- 学生と子どもの様子：緊張していた様子ではあったが、コーナーに遊びに来た子どもたちに話しかけ、次第に笑顔となり遊びの様子を見守ったり、子どもの様子に合わせて反応を返していた。保育所実習では乳児にはあまり関われなかったため、仕事をする前に関わる機会になって良かったという声が聞かれた。
- 養育者と学生の様子：リピーターも多かったためか、養育者から「今日はどんなものがあるんですか？」と質問されたり、「毎回楽しいです」「どんなふう遊ぶのですか？」等質問され、しっかりと笑顔で返答していた姿があった。

### 第9回酒井ゼミ：パネルシアター＆親子あそび

- 参加者：学生15名、養育者23名、子ども29名（0歳児～3歳児）、見学1名

#### 【実施の概要】

- 進め方：導入グループ、コーナー保育グループ、エンディンググループに分かれて展開。導入では、手遊びや絵本の読み聞かせ、ダンス、ふれあい遊びを実施。コーナーでは、運動遊び、プチままごと、ブロック、絵本、制作などを実施。エンディングでは、パネルシアターを実施。
- 学生と子どもの様子：最後のワークショップということで、参加児の年齢幅をある程度予想できていたこともあり、発達を想定した遊びの工夫が検討されていた。積極的に乳幼児に関り、終始笑顔を見せていた。ゼミ活動では「発表」ではなく「保育」であることは伝えてきたが、人前で何かを行うことには緊張を見せていたものの、これまでのゼミ活動

(外部でのイベント参加) がよい経験となっていたようである。

- 養育者と学生の様子：参加親子も場に慣れているようで、互いに緊張感なく、場を共有していた。人生の先輩として養育者の方の温かなまなざしが、学生たちに勇気と励みを与えていたように感じる。

資料2)

【アンケート項目（養育者）】

### アンケートご協力をお願い

敬愛短期大学 総合子ども学研究所

本日は、敬愛短期大学の「親子で遊ぼう！ワークショップ」にご参加くださりましてありがとうございました。今後もご参加いただきました皆様方の声を反映させながら、親子で楽しんでもらえるような企画を行っていきたくと思っています。アンケートにご協力のほど、よろしく願います。

\*本アンケートで得られたご意見は、個人情報保護の観点から個人を特定できないように処理いたします。今後の企画運営・研究に使用させていただきますので、ご賛同いただけましたらご協力お願いいたします。

●お子さんの年齢 \_\_\_\_\_ 歳 \_\_\_\_\_ カ月 ●ご一緒にいらした方の年代 \_\_\_\_\_ 代

1. このイベントは何でお知りになりましたか。

- ①本学HP ②本学Instagram ③ちらし（場所： \_\_\_\_\_ ） ④たまたま通りかかった
- ⑤知人からの紹介 ⑥その他（ \_\_\_\_\_ ）

2. 本日の内容についてお答えください。

- ①大変楽しかった ②まあまあ楽しかった ③楽しくなかった

\*楽しかった点についてお書きください

\*気になった点があればお書きください

3. 会場の環境についてお答えください。

1) 部屋にあると良いと思った設備や玩具

4. 今後希望するイベントがあればお書きください。

5. その他ご意見等ご自由にお書きください。

\*アンケートは以上となります。ご協力ありがとうございました



- 9) 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説 フレーベル館
- 10) こども家庭庁 (2024a) 令和 5 年度地域子育て支援拠点事業実施状況 [https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic\\_page/field\\_ref\\_resources/321a8144-83b8-4467-b70e-89aa4a5e6735/f496238b/20240529\\_policies\\_kosodateshien\\_shien-kyoten\\_34.pdf](https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/321a8144-83b8-4467-b70e-89aa4a5e6735/f496238b/20240529_policies_kosodateshien_shien-kyoten_34.pdf)2026/01/02閲覧
- 11) <https://auth.userlocal.jp/> ai テキストマイニング by ユーザーローカル 2026/01/01閲覧



---

発達支援における  
個別リトミックの有用性に関する研究  
—情緒的安定とコミュニケーション能力に着目して—

二見 美千代・土谷 優

A Study on the Efficacy of Individualized Eurhythmics in  
Developmental Support  
— Focusing on Emotional Stability and Communication Ability —

Michiyo FUTAMI / Yu TSUCHIYA

This study examines the effects of immediate response activities in individual Dalcroze Eurhythmics on the emotional stability and communicative transformation of children with developmental issues. By analyzing two specific cases through individual rhythmic sessions, the research aims to demonstrate the utility of musical immediate response in developmental support.

The subjects were two boys, Child A (4 years old) and Child B (5 years old), both identified with language development delays. The methodology involved video-based behavioral observation and episode description to qualitatively analyze changes in the relationship between the instructor, the child, and the music. The intervention programs included immediate response activities, rhythmic imitation, and auditory exploration using various tools.

The results indicate that immediate response to music enhances self-control and serves as a vital non-verbal bridge for communication in children with verbal difficulties. Furthermore, the individual framework not only improved the children's self-esteem but also provided psychological support for guardians by fostering a positive understanding of their children. The study concludes that individual Dalcroze Eurhythmics is a highly effective therapeutic approach for developmental support.

キーワード：発達支援、個別リトミック、即時反応、情緒的安定、コミュニケーション

## 1 はじめに

今日、教育や福祉の現場において、発達に課題を持つ子どもたちへの早期支援の重要性は広く認識されている。障害児教育における早期の働きかけは、子どもの発達を促す上で有効であると

されているが、実際には個々の特性に応じた柔軟な支援体制は未だ十分とは言い難い。こうした背景から、様々な音楽教育現場においても、単なる演奏技術の習得に留まらない、子どもの特性に寄り添ったアプローチが求められている。音楽を学ぶ意義を単なる技術向上に限定せず、子どもが日々の生活の質（QOL）の向上に活かしていく視点が不可欠である。

リトミックは、エミール・ジャック＝ダルクローズ（1865-1950）によって創案された創造的な教育法一つであるとされている。この創造的という側面は、あらかじめ決められた正解をなぞるのではなく、子どもが音楽を聴き、自らの身体で感じ取り、即座に反応するというプロセスそのものに価値を置くものである。

特に、発達の特性から集団指導への適応に困難を示す子どもにとって、音楽を通じた自己表現の場は重要であるといわれている。多動性や不注意、感覚の過敏性を持つ子ども、あるいは言葉によるコミュニケーションに課題を抱える子どもにとって、音楽は非言語的で受容的な媒体として機能する。馬場（2010）が楽器の活用について

「音楽療法臨床における楽器の活用には、運動機能の発達や注意の集中・持続の向上など様々な効果があることが、臨床研究によって検証されている」

と指摘するように、音楽的刺激に対する能動的な関わりは心身の両面にわたる発達を支える一助となる。

さらに、即時反応（クイック・レスポンス）を軸とした音楽活動は、子どもの主体的かつ創造的な体験の基盤となる。丹羽（2025）が即興的な音楽体験の意義について

「その即興音楽で、子どもがより豊かな音楽体験が拡がり、自己を育む力となることへとつながる」

と結論づけているように、指導者との音による対話である即興的なやり取りは、子どもが安心して自己を表現できる信頼関係を築き、情緒的な安定をもたらすと考えられる。

## 2 目的

本研究では、筆者らがそれぞれ行っているリトミッククラスでの実践を通じ、個別リトミックにおける即時反応の活動が、発達に特性を持つ子どもの情緒的安定およびコミュニケーションの変容にいかなる影響を及ぼすかを検討する。リトミックの引き起こす音楽的即時反応が発達支援に有用であることを示すことが本稿の目的である。

## 3 方法

### 1) 調査及び分析方法

本稿では、幼児2名に発達支援を目的としたリトミックの個別指導を実践し、指導経過の分析を行った。分析にあたっては、ビデオ記録をもとに、以下の視点および手順に従って検討した。

(1) ビデオ記録に基づく行動観察：全セッションをビデオ撮影し、対象児の発話、表情、身体

動作、および指導者との相互交渉を詳細に記録した。Aくんについては特に音響刺激への定位反応、Bくんについては対人不安の変容に着目した。

(2) エピソード記述および変容プロセス分析：ビデオ記録に基づき、対象児の変容が顕著に表れた場面を「エピソード記述」として抽出した。介入前後での行動の変化を質的に分析し、特に「指導者・対象児・音楽」の三者の関係性がどのように深化・変容したかというプロセスに焦点を当てて検討を行った。

## 2) 対象児

本研究の対象は、筆者らがそれぞれ行っているリトミッククラスに在籍し、専門機関より言語発達遅滞の指摘を受けている以下の男児2名である。

(1) Aくん（4歳）：言語表出の未熟さに起因する情動制御の困難さへの支援が必要とされている。保育園では孤立並行遊びの傾向が強いが、指導者に対しては非言語的な交流意欲を有する。3歳3か月時に一度指導を試みたが、活動への関心の低さから中断。その後、4歳を機に成長による変化を踏まえ個別指導を再開した。

(2) Bくん（5歳）：集団内における対人不安や、言語による意思疎通の困難さが大きい。保護者からは、音楽を通じた情緒の安定およびコミュニケーション能力の向上を目的として、個別指導の依頼がなされた。

## 3) 実施期間および頻度

実践は、両児に対し個別セッションを計2回実施した。Aくんは1回20分のセッションを1週間間隔で行った。1年ぶりに会う指導者への反応と音楽的刺激に対する反応の観察に重点を置いた。Bくんは1回30分のセッションを3週間の間隔で行った。セッション間における微細な行動変容を詳細に捉えるため、集中的な観察および介入を行った。

## 4) 実践の内容（介入プログラム）

プログラムは、リトミックの基本理念に基づき、対象児の興味・関心や発達段階に合わせて柔軟に構成した。主な活動内容は以下の通りである。

(1) 即時反応および随伴的介入：ピアノの即興演奏による音の消失や変化を聴取し、身体動作を切り替える活動。特にAくんにおいては、聴覚刺激への注意を促すため、自発的な動きや興味の対象に音を同期させた。

(2) リズム模倣および音楽的対話：即興唱や打楽器等を用い、指導者が提示するパターンを模倣する活動。音を介した相互的なやり取りを促し、非言語的な対話の基礎を構築した。

(3) 音響探索と感覚遊び：ホース、スカーフ、カード等の道具を用い、音の鳴る仕組みや触れた物の質感、和音の変化を多角的に探索し、感覚的な気づきや期待感を促す活動。

(4) 聴覚情報の象徴化と視覚化：聴取した音を感じるままに画用紙に描画する活動や、長調・短調の対照的な音のニュアンスの理解を促す活動。

## 5) 倫理的配慮

調査に際しては、対象児の保護者に対し研究の目的、個人情報保護、研究以外ではデータを使用しないこと及び協力は任意でありいつでも撤回可能であることを、書面および口頭で説明し了解を得た。データは匿名化を施し厳重に管理した。

## 4 臨床実践報告：リトミック介入における対象児の変容過程

### 1) Aくんの事例（土谷指導）

#### (1) 第1回セッション：音響刺激への定位と音楽を通じた表出の端緒

初回セッションでは、1年ぶりの再会となる指導者への反応や環境に適応しつつ、音楽的刺激に対してどのような反応を示すかに焦点を当てた。

##### ・教具への興味と音の同期

入室直後、Aくんは柔らかい素材の蝶の入れ物（資料1）に強い関心を示した。指導者がある動きに合わせて、入れ物を空中で揺らし見せてから童謡『ちょうちょう』（資料2）を弾き歌いすると、Aくんは視線で蝶を追従する様子を見せた。さらに、音楽のフレーズの切れ目でピアノの高音域を鳴らす（チリンという音を提示する）と、その音に反応して「バシーン」と言いながら蝶を叩き落とす動作が見られた。これは、特定の音響刺激を合図として捉え、自身の身体動作を同期させる「即時反応」の萌芽であると解釈できる。

##### ・即興唱による言語的コミュニケーションの誘発

キャンディボール（資料3）を用いた色分け遊びでは、2拍子のリズムに乗せて「あーお」と即興唱を行いながらボールを移し替える活動を展開した。指導者が青いボールを示した際、Aくんから「これなーに？」という自発的な問いかけが見られた。これに対し指導者が「あーお」と即興唱で返答した。また、指導者が赤いボールを差し「これなーに？」「あーか」と歌うと、Aくんは言葉のみで「あか」と明瞭に発話した。その後の活動では、鍵盤の上にボールを置く動作に即興唱を付随させると、微かに歌声を真似る様子も観察された。

##### ・音楽的ニュアンスに対する情緒的共鳴

蝶を叩く動作に関連付け、指導者が「痛いよ」という言葉と共に短調の音楽を奏でると、Aくんはそれまでの笑顔から一転して悲しそうな表情を浮かべ、静かに音楽を聴取した。その後、長調の音楽に切り替えると表情に変化が見られた。Aくんが音楽理論上の長・短調を概念として聴き分けているかは不明であるが、音が持つ情緒的なニュアンスを敏感に察知し、表情の変化という形で自己を表現していることが確認された。

##### ・和声的解決への期待感と共有体験

車カード（資料4）を用いた活動では、属七の和音<sup>1</sup>（ハ長調の場合はソシレファ）でカードを隠し、主和音<sup>2</sup>（ハ長調の場合はドミソ）と同時にカードを見せる「いないいないばあ」を繰り返した。Aくんは属七の和音から主和音に移行することで和声が解決することを感覚的に理解し、その都度大笑いする反応を示した。音楽的な「期待と解決」の構造が、指導者との心地よい共有体験を支える基盤となったといえる。なお、タンバリンによるクラクションのリズム模倣を促したが、Aくんは楽器自体に興味を示さず、模倣には至らなかった。

#### (2) 第2回セッション：活動の保持と能動的な関わりの深化

第2回セッションでは、前回の活動経験がどのように保持され、指導者や音楽に対する関わり方がどう変化したかを分析した。

##### ・前回の学習の保持と意図的な働きかけ

入室後、Aくんは自ら蝶の入れ物（資料1）を持ち出し、指導者に提示した。前回の活動記憶

に基づき、自らコミュニケーションの場を設定しようとする能動的な意向が伺える。指導者が再び『ちょうちょう』（資料2）を演奏すると、笑顔で同室している保護者に入れ物を渡す行動が見られた。この際、フレーズのタイミングと受け渡しの動作を完全に一致させるまでには至らなかったが、音楽を感じながら他者（保護者）を介在させる三者関係的な広がり確認された。

#### ・随伴性への意識の変化と自己コントロール

キャンディボール（資料3）の色の名前を即興唱しながら箱へ入れる活動において、前回は「Aくんの動きにピアノが合わせる」形が主であったが、今回はAくんが「ピアノの音に合わせてようとする意欲」を見せる場面が増加した。はじめは自身のスピードで黙々と取り組み、音と動作を完全に同期させることは困難であった。しかし、時間の経過とともに講師の即興唱に合わせてボールを移すことができるようになった。これは、指導者の演奏による歩み寄りにより、Aくんが音刺激に対してより能動的に注意を向けることができたといえる。

#### ・音響刺激への多角的な反応と発話意欲の継続

活動に慣れてくると、Aくんは「早く即興唱をしてほしい」という意図を込めて指導者にボールを見せるなど、積極的に自分の思いを伝える仕草をするようになった。また、お手玉を用いた活動で指導者が意図的に「変な音」を出すと、それに対しても楽しそうに笑うなど、予測から外れた音の刺激を楽しむ柔軟な反応が見られた。

#### ・情動の安定と集中力の持続

セッションの途中で集中力が途切れると「ばばー」と言い保護者を求める場面があったが、音楽活動に没頭している間は保護者の不在（一時的な退室）を忘れ、自己の活動に深く集中する様子が見られた。最終的に、音楽活動（音楽的介入）で情緒が安定した状態が保たれ、設定された活動時間を完遂することが可能となった。

### 2) Bくんの事例（二見指導）

#### (1) 第1回セッション：自己完結的な表出から音への意識化へ

##### ・導入時の様子と特徴

指導の初期、Bくんは環境の変化に対する不安からか、あるいは自己表現の一環としての行動か、入室直後に私物の絵本や自作のおもちゃやフィギュアを取り出した。そして、特定のキャラクターについて一方的に話し続ける姿が観察された。

##### ・模倣の難しさと注意の散漫さ

スカーフを用いて「鳥の動きを真似る活動」や、Bくんの動きに合わせてピアノを即興で弾く活動を行ったが、一つの活動に長く取り組むことは困難であった。Bくんの意識は道具そのものや周囲の物へ容易に移ってしまい、音楽を身体表現するまでには至らなかった。特に音の強弱（大きい波・小さい波をイメージ）を身体表現する課題では、音を聴いて動くのではなく、自分の中で作り出したリズムで動いてしまう傾向が強く見られた。

##### ・リズムと細かい動きの特徴

指導者の楽器演奏を注視し、真似ようとする姿勢はあったが、リズムの捉え方には強い「こだわり（固定化）」が見られた。指導者がリズムに変化（シンコペーションや付点リズムなど）をつけても、Bくんが叩くリズムは「タン、タン」や「タタタン」といった単純なパターンに戻ってしまった。これは言葉のリズム遊び（好きなキャラクター名を用いた活動）においても同様で

あり、言葉本来のリズムよりも、自分の中にあるリズムを優先させる傾向であった。

#### ・音の視覚化に見られる象徴機能の芽生え

一方で、エッグマラカスを左右交互に振って音を鳴らす活動や、打楽器の音を聴きながら画用紙に描く「音の視覚化」（資料5）においては、優れた聴き分け能力を発揮した。スタッカートのような短く断続的な音に対しては「点」を打ち、ギロ<sup>3</sup>などの擦過音に対しては「線」を描くなど、音の特徴を視覚的に捉え直す能力は非常に高く、この時点で音の性質を捉える基礎的な認知力は備わっていたといえる。

#### ・即時反応と対人関係の変化

音楽の停止に合わせて動きを止める「ストップ&ゴー（即時反応）」では、音の消失に合わせて自分の動きをコントロール（制止）することはまだ困難であった。しかし、セッションの終盤には、当初の自己完結的な様子が和らぎ、指導者の合図を待ったり、次の活動を予想して耳を傾けたりする行動が見られるようになった。これは「他者の存在」を意識し始めた現れであると考えられる。

### （2）第2回セッション：聴覚的イメージの統合と時間的予期の形成

#### ・聴覚的シンボルと多角的な探索

第2回では、音に対して意味を見出す力（象徴化）が飛躍的に伸びた。レインスティック<sup>4</sup>の音を聴いた瞬間、Bくんはすぐに「波の音だ」と反応した。これは、単に音を聴くだけでなく、自身の経験やイメージ（海や水のリズム）と結びつけて音を捉えられたことを意味する。

ホースを用いた活動でも創造的な探索が見られた。ホースを耳に当てる、息を吹き込む、結ぶ、擦って音を出すなど、多角的な試行錯誤（探索的行動）がみられた。特に指導者がホースを回転させて出した風切り音に対し、強い注視と共に「風の音だ」と表現したことは、物理的な音を抽象的な言葉の概念へと結びつける力が形成されたことを示している。

#### ・音楽への身体的な同調

第1回で見られた「自己のリズムへの固執」が減少し、音楽の強弱（ダイナミクス）や調性の雰囲気に対して敏感に反応するようになった。ピアノの音がだんだん大きくなる（クレッシェンド）のに合わせてホースの回転速度を上げ、エネルギー強さを視覚的・運動的に表現することや、スタッカートのような短い音に合わせてジャンプを繰り返すなど、音楽の構造に自分の動きを一致させることが可能となった。

#### ・時間の予測と動きのコントロール

特に、休み（休符）を含む4拍子のリズムを正確に再現できた点は特筆すべき変化である。ボールを棒で叩くという複雑な動作を伴いながらも、提示されたリズムを正確に捉えることができた。さらに、次にアクセントが来るタイミングを予測し、音が鳴る瞬間に合わせてボールを弾ませる姿も見られた。この「予測して動く」行動は、音楽という時間枠の中で、脳の実行機能（予測や抑制）が働き始めたことを示唆している。

#### ・主体的な関わりと達成感

ギロを用いた活動では、講師がギロを擦る音を聞くと同時に自分の体を回転させることや、爪で直接擦る、楽器を抱え込んで振動を感じるなど、楽器と深く関わる姿が観察された。本セッションにおいてホースの活動に熱心に取り組んだのは、単に回転運動への執着だけでなく、自分

の動きが直接音の変化（ピッチの変化や強弱）を生み出すという、自らの働きかけによる達成感「自己効力感」を味わえたことが大きな要因と考えられる。

## 5 考察：リトミック介入における発達支援の機序と変容

### 1) 即時反応がもたらす情緒的安定と自己コントロール

本事例のリトミック介入において、最も大きな変化として見られたのは、音楽への「即時反応」を通じた情緒の安定である。子どもがピアノの音の停止や変化に合わせて自分の動きをコントロールする過程は、単なる運動能力の向上ではない。耳から入った情報を自分の身体感覚へと変換する、高度な適応行動といえる。

このような即時反応のアプローチは、子どもが本来持っている音楽性を目覚めさせ、自己表現への意欲を引き出す。特に指導者が子どもの動きや心情に寄り添い、音を介して関わることで、音の違いや変化を直感的に把握し、その変化を動きに置き換えるという体験が積み重なる。これが子どもの自尊感情を高め、衝動的な行動を抑える「自己コントロール能力」を自然に育む仕組みとして機能したと考えられる。

### 2) 多感覚統合とイメージの広がり

活動が進むにつれて、音を「波」として捉えたり、特定のイメージを持って動いたりする姿が見られるようになった。これは、聴覚、視覚、運動感覚が互いに影響し合う「多感覚統合」が促された結果である。本事例のリトミックの指導法を取り入れた活動は、子どもが音楽との一体感を味わい、想像力を膨らませて音楽と深く関わることを助けたと考えられる。

また、感覚的な理解から段階的に音楽の要素を学んでいくプロセスは、子どもが音を自在に扱い、他者との交流に活用するための道筋となる。子どもが音を単なる物理的な振動ではなく、意味のあるイメージとして捉え表現したことは、認知発達の側面からも非常に重要な変化であったといえる。

### 3) 非言語的コミュニケーションと「三項関係」の構築

子どもと指導者の間で、楽器や音を媒介とした「三項関係」が築かれたことは、社会性の発達における大きな進歩である。楽器活動や身体表現には、子ども一人ひとりの個性が如実に現れる。音楽活動は言葉に代わるコミュニケーション手段となり、閉鎖的な自己の世界から、他者との関係を築くきっかけとなる。

乳児と養育者の間で交わされる心地よい歌のような語りかけが、互いの絆を支えるのと同様に、リトミックにおける即興的な音のやり取りも、情緒的な交流として機能する。子どものわずかな動きを指導者が音ですくい上げ、それに応えて子どもが再び反応するという心地よい循環が信頼関係の土台となり、言葉を越えたコミュニケーションの可能性を広げたと考えられる。

## 6 まとめ

本研究では、発達に特性を持つ子どもへの個別リトミックの実践を通じ、音楽的即時反応が情緒的安定およびコミュニケーションの変容に及ぼす影響を及ぼすかを検討した。一連の実践を振り返ると、音楽の刺激に即座に反応する活動は、単なるリズム感の育成に留まらず、自己コントロール能力を高める確かな手立てとなったことが示された。こうした即興演奏を軸としたアプローチは、子どもの内に秘められた音楽性を引き出し、主体的かつ創造的な活動へと導く大きな

原動力となった。

また、言葉による対話が困難な子どもにとって、音や楽器は自己と他者を結びつける共通の対象となり、非言語的なコミュニケーションを支える重要な架け橋となった。指導者との即興的な音のやり取りは、子どもが安心して自己を表現できる信頼関係の基盤を築いた。

発達支援においては、子どもへのアプローチだけでなく、保護者の育児負担を理解し、周囲が連携していく視点が欠かせない。障害を持つ子どもの養育には多くの困難が伴うため、保護者の不安や否定的な捉え方を、前向きな見方へと変えていく働きかけが重要である。

リトミックを通じて子どもの「できた」という輝く姿を保護者と共有することは、親子関係の再構築に大きく貢献する。本実践における個別リトミックの枠組みは、子ども自身の変化を促すだけでなく、保護者が心を落ち着かせ、わが子への理解を深める助けとなったと考えられる。近年、リトミックの実践は、幼児教育、学校教育、障がい者の活動への適用に留まらず、様々な場面に採り入れられるようになってきており、このことは発達支援におけるリトミックの包括的な有用性を示すものであると考える。

さらに、個別指導という枠組みは、子ども自身の自尊感情を高めるだけでなく、保護者への心理的支援としても多大な役割を果たした。リトミックを通じて子どものポジティブな変化を保護者と共有できたことは、親子関係の再構築を促し、家庭における療育環境を整える一助となった。これらの成果から、個別リトミックは発達支援における極めて有効な療法的アプローチであると結論付けられる。

## 7 今後の課題

本稿で示した実践は二事例の報告であり、各事例のセッション数も十分とはいえない。リトミック介入の有用性をより客観的に捉え一般化していくためには、今後さらなる事例の蓄積が求められる。そのためには、即興演奏の技術とその指導プロセスの体系化が求められるが現実的にはまだ多くの課題がある。また、子どもの微細な反応をどのように音楽的な認知へと導き、表現の幅を広げていくかという段階的な指導のあり方についても、より具体的な道筋を明らかにする必要がある。

さらに、個別指導で培った情緒的安定や社会性の芽生えを、いかにして集団の中での「ともに学ぶ」活動へと発展させていくかという点も、就学後の社会適応を見据える上で避けては通れない課題である。

子育て環境が変化し続ける現代において、多様な支援の方法が必要となっていくだろう。非言語での発達支援もその一つであり、そのあり方として音楽を通じた支援がより多くの親子に届くよう、今後も実践と研究の両面から探究を深めていきたい。

## 謝辞

本研究の遂行にあたり、個別リトミックの実践に多大なるご理解とご協力をいただいたAくん・Bくんおよび本研究の趣旨を快諾し、温かく見守ってくださった保護者の方々に、心より深く感謝申し上げます。

資料



資料1 ちょうちょうの入れ物



資料2 「ちょうちょう」楽譜：筆者（土谷）はこれを元に即興で編曲して使用



資料3 キャンディーボール



資料4 車カード



資料5 音の視覚化  
点はスタッカート、短線は擦過音、螺旋は回転する音を表現している。

- 
- 1 属七の和音は、「属和音の一種で、属音上の七の和音。属三和音上に短三度を加えたものでいかなる属七の和音もひとつの調にしか含まれない。ただし、同名の長、短調には共通する。V<sub>7</sub>と表記」（引用：「新訂標準音楽辞典（アーテ）」音楽之友社）
  - 2 主和音は、「音階の主音上の三和音。長調では長三和音、短調では短三和音になる。Iと表記」（引用：「新訂標準音楽辞典（アーテ）」音楽之友社）
  - 3 ギロ（ガイロ）は、「キューバン・バンドにつきものの打楽器。くびれのないひょうたんを乾かして、堅い表皮にギザギザを刻み付け、針金のブラシでこすって摩擦音を出す。」（引用：「新訂標準音楽辞典（アーテ）」音楽之友社）
  - 4 レインスティックは、「空洞の木にサボテンのとげを打ち込んで、種や小さな雑穀物を封入したガラガラ属の体鳴楽器。雨が降っているような音がするため、その名がついた。」（民音音楽博物館、[https://museum.min-on.or.jp/collection/detail\\_T00148.html](https://museum.min-on.or.jp/collection/detail_T00148.html)、2025.1.18検索）

#### 参考文献

- ・赤嶺絵史子著「即興演奏の技術を獲得させる即興指導のプロセスと実践」、音楽教育実践ジャーナル第18巻、2020年、pp.26-35
- ・石丸由理「音楽教室におけるリズム活動の実際—ユリ・リトミック教室での実践より」、音楽教育実践ジャーナル第12巻第1号、2014年、pp.102-106
- ・塩原麻里「ジャック＝ダルクローズのリトミック—『聴くからだ』と『演奏するからだ』をつくる音楽教育の基礎として」、音楽教育実践ジャーナル第6巻第2号、2009年、pp.55-62
- ・「新訂標準音楽辞典（アーテ）」、(株)音楽之友社、1992年
- ・「新訂標準音楽辞典（トーワ）」、(株)音楽之友社、1992年
- ・丹羽裕紀子著「ノードフ・ロピンス音楽療法における即興演奏とリトミック」、リトミック・オンライン・ジャーナル、第4巻第2号、2025年、pp.11-22
- ・馬場悦子著「障害児の楽器の認知過程に関する一考察—アルジェルマン症候群児への音楽療法を通して—」、純真短期大学紀要第51号、pp.45-54、2010年

---

令和7年度運営委員（五十音順）

大野 雄子	藤川 志つ子
木下 太一	藤森 孝幸
久保木 健夫	堀 由佳
齋藤 めぐみ	

---

『敬愛短期大学総合子ども学研究所 年報』

発行 2026（令和8）年3月31日  
編集者 敬愛短期大学総合子ども学研究所 運営委員会  
発行者 敬愛短期大学総合子ども学研究所  
所長 齋藤 めぐみ  
〒263-8588 千葉県千葉市稲毛区穴川1丁目5番21号  
TEL 043-251-6363（代表） FAX 043-251-6407  
制作 株式会社 正文社

---

敬愛短期大学